

# 帝國讀本

改制新版

## 卷七

375.9  
Ha7  
資料室

41600

教科書文庫

4
810
41-1938
2000301813

S13  
1978

### Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C  
Y  
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

### Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

2 1 20 9 8 7 6 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

文部省檢定濟

昭和三十一年十一月一日 中國語文教科

室料資

375.9  
H27

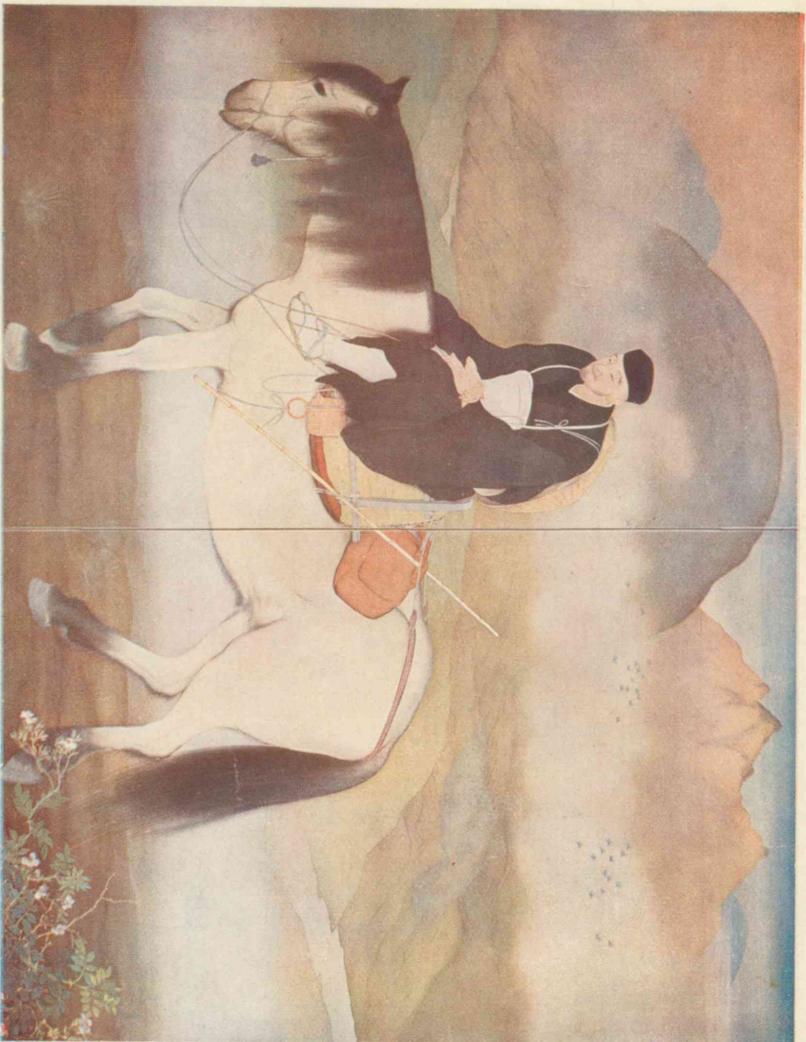
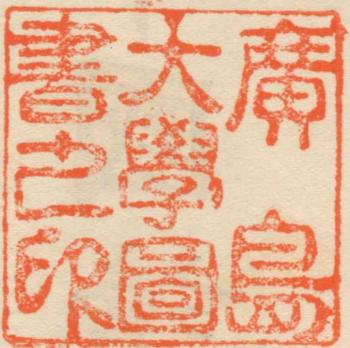
# 帝國讀本

改制新版

文學博士 芳賀矢一 編  
文學博士 上田萬年 訂補  
文學士 長谷川福平

合資會社 富山房發兌

Handwritten notes in cursive script (sōsho) on the right page, including the characters "神" (Shin) and "日" (Hi).



旅人

野田九浦筆

帝國讀本 改制新版 卷七

目次

一 日本文學……………	一
二 徒然草その二……………	七
をりふしの移り變り……………	七
三 徒然草その三……………	一〇
家居のさま……………	一一
栗栖野……………	一二
四 徒然草その四……………	一三
常ならぬ世……………	一三
一事を勵むべし……………	一五

五 櫻あらしそひ(狂言).....六  
 六 櫻咲く日本よ(自修文).....二  
 六 晩春の別離(詩).....島崎藤村...六  
 七 美術に現れた日本國民性.....藤懸静也...五  
 八 奥の細道その一.....松尾芭蕉...七  
 九 奥の細道その二.....松尾芭蕉...五  
 一〇 東西自然詩觀.....厨川白村...五  
 二 詩の心.....吉田絃二郎...七  
 三 源三位.....(平家物語)...七  
 文學と氣品(自修文).....六  
 三 小松内府その一.....(平家物語)...三  
 四 小松内府その二.....(平家物語)...六  
 五 平家雜感.....高山林次郎...九

一六 みとり日記.....小林一茶...六  
 一七 ほととぎす(俳句).....一〇四  
 一八 芳流閣上の血戰.....瀧澤馬琴...一〇五  
 一九 日本精神の復興.....池岡直孝...二一  
 日本精神と日本武道(自修文).....互理章三郎...二二  
 二〇 二もとある松(短歌新調).....一三〇  
 二 流泉啄木.....(今昔物語)...一三  
 三 四季小品.....一三六  
 春 雨.....中島廣足...一三  
 風 鈴.....香川景樹...一三  
 さぬた.....清水濱臣...一三  
 秋の山田.....藤井高尙...一四  
 冬のコゝろ.....伴蒿蹊...一四〇

三 黄菊白菊(俳句)……………一四

二 蘭學開眼……………一三



# 帝國讀本 改制新版 卷七

## 一 日本文學

優美閑雅な日本語を使つて、平和柔順な國民が歌つた歌、それには長歌もあり短歌もあるが、これ等の歌が日本文學の基礎と言つてよろしい。四圍の美しい自然を歌つて、人事もすべて自然の譬喩に寄せられて居ることが、早く後世の文學の特質を示して居る。古事記、日本紀の歌、萬葉集の歌などは即ちそれ等の國民歌の幾分かを傳へたもので、推古天皇以來支那の文明が傳はつて、段々と漢文漢詩が用ひられるやうになつても、日本固有の歌は、それとは別途に發達した。殊に上代からの神祇を祭る詞、祝詞の形式を應用して、寧ろ漢詩に對抗して、特殊な國民思想を歌つたのが、柿本人麿、山部

### 國民歌

(一) 歌人。歌聖と稱せられる。第四十一代持統天皇と文武天皇の二代に仕へた。皇とに仕へた。天(二) 奈良時代の歌人。稱せられる。並









(一)十二月十九日  
 から二十一日  
 まで三日間宮  
 中で行はれた  
 御佛事  
 (二)朝廷で十陵八  
 墓に幣帛を奉  
 られるその使  
 やんごとなし  
 (三)十二月晦日に  
 行はれた鬼や  
 らひ  
 ことごとくしく  
 のしく

空こそ、心細き物なれ。御佛名(一)荷前(二)の使立つなどぞ、哀れにやんごと  
 なき。公事どもしげく、春のいそぎに取重ねて催し行はるゝ様ぞい  
 みじきや。

追讎(三)より四方拜に續くこそ面白けれ。晦(四)の夜いたう闇きに、松ど  
 も點して、夜半過ぐるまで人の門たゝき走りありきて、何事にかあ  
 らん、ことごとくしくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方より流石に音  
 なくなりぬるこそ、年の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて魂祭  
 るわざは、この頃都にはなきを、東の方にはなほする事にてありし  
 こそ哀れなりしか。かくて明行く空の氣色、昨日に變りたりとは見  
 えねど、引きかへ珍しき心地ぞする。大路の様、松立てわたして、花や  
 かに嬉しげなるこそまた哀れなれ。

徒然草 その三

つきぐし

家居のさま

家居のつきぐし、しくあらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、  
 興あるものなれ。

よき人ののどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、  
 ひとときはしみぐしと見ゆるぞかし。

今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭  
 の草も心ある様に、すのこすいがいのたよりをかしく、うちある調  
 度もむかしおぼえてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くのたくみの心を盡して磨きたて、唐の、日本の珍しくえなら  
 ぬ調度ども並べ置き、前裁(五)のくさ木まで心のまゝならず作りなせ  
 るは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、ま  
 た時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。  
 おほかたは、家居にこそ事様は推しはからるれ。

木立ものふり

(一)龜山天皇の第  
十一皇子性惠  
法親王

後徳大寺の大臣トドの寢殿に鳶トビのさせじとて繩を張られたりけるを西行が見て、鳶のゐたらん何かは苦しかるべき。この殿の御心、さばかりにこそとて、その後は参らざりけると聞き侍るに、綾小路の宮のおはします小坂殿こさかどのの棟に、いづぞや繩を引かれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、誠や、鳥のむれゐて池のかへるをとりければ、御覽じ悲しませ給ひてなん。と人の語りしこそ、さてはいみじくとこそ覺えしか。後徳大寺にもいかなる故か侍りけん。

栗栖野

(二)今京都市東山  
區山科  
心細く住みな  
したる庵  
かくてもあら  
れけるよ

神無月の頃、栗栖野くりすのといふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遙かなる苔の細路を踏分けて、心細く住みなしたる庵あり。木の葉にうづもる、かけひのしづくならでは、つゆおとなふ者なし。閨伽棚に菊紅葉など折散したる、流石に住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと哀れに見る程に、かなたの庭に、大きな



(筆陵岳村中) 里の野栖栗

る柑子かんじの木の枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、少し事さめて、この木なからましかばとおぼえしか。

四 徒然草その四

常ならぬ世

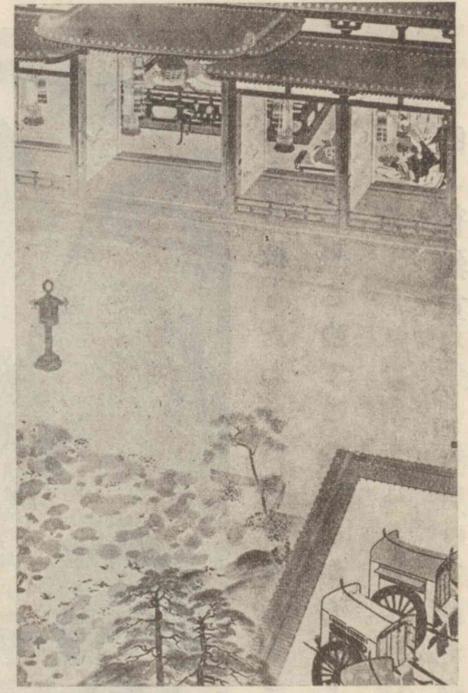
(一) 飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、たのしびかなしび行交ひて、花やかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、變ら

(一)「世の中は何  
か常なる飛鳥  
川きのふの淵に  
ぞけふは瀬に  
なる古今集  
よみ人知ら  
ず」

(一) 桃李不言、  
春華秋實、  
幾暮、烟霞無  
跡、昔誰、  
和漢明詠集、  
菅原文時

(二) 藤原道長。

(三) 第九十五代花  
園天皇の御代、  
一九七二年一  
九七六年



(筆夫忠村吉) 寺成法

ぬ住家は人あらたまりぬ、桃李(一)もの言はねば、誰と共にか昔を語ら  
ん。まして見ぬ古へのやんごとなかりけん跡のみぞいとほかなき。  
京極殿、法成寺など見るこそ、志とまり、事變じにける様は哀れ  
なれ。(二)御堂殿の造り磨  
かせ給ひて、莊園多く  
寄せられ、我が御族の  
みみかどの御うしろ  
み、世のかためにて、行  
末までと思しおきし  
時、いかならん世にも、  
かばかりあせ果てん  
と思してんや。大門、金堂など近くまでありしかど、正和(三)の頃南門は  
焼けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまゝにて、とり建つるわざも

(一) 藤原行成、  
の名人で、小  
野道風、藤原  
佐理と共に三  
蹟と稱せられ  
た。  
(二) 藤原兼行。

因果の理

世渡るたづき

桃尻

一事を勵むべし

なし。無量壽院ばかりぞそのかたとして残りたる。丈六の佛九體いと  
尊くてならびおはします。行成(一)大納言の額、兼行(二)が書けるとびら、あ  
ざやかに見ゆるぞ哀れなる。法華堂なども未だ侍るめり。これまた  
いつまでかあらん。かばかりの名残だになき所々は、おのづから礎  
ばかり残るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬づに見ざ  
らん世まで思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

ある者子を法師になして、學問して因果の理(一)をも知り、説經など  
して世渡るたづきともせよ。と言ひければ、教のまゝに説經師にな  
らん爲に、先づ馬に乗習ひけり。輿、車もたぬ身の、導師に請ぜられん  
時、馬など迎におこせたらんに、桃尻(二)にて落ちなんは心憂かるべし  
と思ひけり。次に佛事の後、酒など勸むる事あらんに、法師の無下に  
能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事を習ひけり。

やうく境に入る

二つのわざやうく境に入りければ、愈よくしたく覺えて嗜みける程に、説經習ふべきひまなくて、年よりにけり。

世をのどかに思ふ

この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若き程は諸事につけて、身を立て、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末久しくあらず、事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、先づさしあたりたる目の前の事にのみ紛れて、月日を送れば、ことごとになす事なくして、身は老いぬ。終に物の上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取返さるゝ、齡ならねば、走りて坂を下る輪の如くに衰へ行く。

されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、何れか優るとよく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひ捨て、一事を勵むべし。一日のうち一時のうちにも、數多の事の來らんに、少しも益の優らん事を營みて、その外をばうち捨てて、大事を

急ぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとりもちては、一事も成るべからず。例へば、碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人に先だちて小を捨て大につくが如し。それにとりて、三つの石を捨てて十の石につく事は易し。十を捨てて十一につく事は難し。一つなりとも優らん方へこそつくべきを、十までなりぬれば、惜しく覺えて、多く優らぬ石には換へにくし。此をも捨てず、彼をも取らんと思ふ心に、彼をも得ず、此をも失ふべき道なり。

京に住む人、急ぎて東山に用ありて、既に行著きたりとも、西山に行きてその益優るべき事を思ひ得たらば、門より歸りて西山へ行くべきなり。此所まで來著きぬれば、この事をば先づ言ひて、日をさゝぬ事なれば、西山の事は歸りてまたこそ思ひたゝめと思ふ故に、一時の懈怠、即ち一生の懈怠となる。これをおそるべし。

一事を必ず成さんと思はゞ、他の事の敗るゝをもいたむべから

一時の懈怠即ち一生の懈怠となる

ず、人の嘲をも恥づべからず。萬事にかへずしては、一の大事成るべからず。

五 櫻あらしそひ

えいたさぬ

アト「これはこのあたりの者で御座る。この頃はいつ方も花の盛ぢやと申す程に、花見に参りたう存ずれども、暇がなさに参る事もえいたさぬ。もはや暇になつて御座る程に、今日は花見に参らうと存ずる。先づ太郎冠者を呼出し、申しつけう。やい、太郎冠者あるか。シテ「はあ。アト「ゐたか。シテ「お前に居ります。」

アト「汝を呼出す事、別の事ではない。この頃は方々の花盛ぢやといへども、暇がなさに、花見に行く事もならなんだ。もはや暇になつた程に、花見にいでうと思ふが、何とあらうぞ。シテ「これは珍しい事を仰せられます。この頃は櫻の盛ぢやと申す程に、櫻を御覽ぜられう

頼うだ人

言語道斷



櫻あらしそひ (山口蓼洲筆)

とあれば、尤もで御座るが、珍しからぬはなを御覽ぜられて、何にさせらるゝ。アト「いや、おのれは何事をいふ。櫻も花も同じ事ぢや。シテ「これは頼うだ人も覚えぬ事を仰せらるゝ。さやうに仰せられたらば、人中で恥をかかせられう、身どもは苦しう御座らぬが。アト「して、汝がそのやうに言ふは子細があるか。シテ「なか、子細こそ御座れ。はなが見させられたくば、私が見なを見させられ。餘所へ御座るまでも御座らぬ。アト「いや、おのれは言語道斷の事を言ひをる。汝が面なは鼻といふ。花といふは別ぢや。シテ「さやうでは御座らぬ。歌などにも櫻とは詠まれたれども、花とは詠まれ





世捨人  
隱遁した人。

生花をめぐつての旅人であつた。花巡禮であつた。彼は秋の山に鹿も聴いた。雪の野も歩いた。彼は寂しい世捨人のやうにも思はれる。けれども、彼くらゐ日本の春を愛し、日本の春を解した詩人はないであらう。

ねがはくは花のもとにて春死なん

そのきさらぎのもちづきのころ

彼は春に對しては貪慾であつた。鳴立澤（しやうたつせき）のほとりの秋を見た頃には、恐らく彼は人生無常の相（さう）をそのまゝに受容（うけい）れて、死も恐れなかつたであらう。けれども再び旅に春を見た刹那、吉野の花に包まれた日に、彼の執心は燃えたであらう。彼は二十年も三十年もなほ生き續けて行きたいと思つたであらう。湖畔詩人ウオーヅ（ウオーズ）ウオーズであつたかと思ふが、この附近の風光は實にいゝ。唯一つ悪い事には、餘り景色がいゝ爲に、死ぬ事がいやになる。といふ意味の事を語つた事がある。西行も恐らく同じ事を感じたであ

相  
すがた。あり  
さま。

湖畔詩人

十九世紀の初  
めイギリスの  
北部の湖水地  
方に住んだウ  
ォーヅウオー  
ズ、サウジイ、  
コルリッヂ等  
の詩人の一派  
を言ふ。  
イギリスの  
人。西紀一  
七〇〇年—  
一八七詩

(一)芭蕉の句。

らう。伊賀から大和への途すがら、春（はる）なれや名もなき山の朝霞（あさぎり）と歌つた日、芭蕉も恐らく同じ事を感じたであらう。菜の花や月は東に日は西に（あづまにひはにしに）に、蕪村ならずとも、春の日の日本に生れた幸福を感じないではゐられないであらう。

西行も芭蕉もいはゆる世捨人である。しかし、印度あたりの世捨人とはまるで違つてゐる。どこまでも世を捨切れぬ人たちである。彼等が世を捨てたといふのは、餘りに自然を愛したが故である。心ゆくまで自然に浸されたい爲に、暫く世の煩はしさを避けたばかりである。自然を味はふといふ點では、誰をも彼をも受容れてゐる。日本國中の人々を（ひと）一緒に誘ひ出して、自然を味はつてゐる。

日本人はこせくしてゐるとよく非難される。しかし、花の盛の日本人を見ると、あながちさうでもない。花に恵まれた日本の自然が、春の日になれば、日本人の心を特に淨化（じやうか）してくれるのか

淨化する  
きよくする。

知らぬが、ともかく花の盛の日本人は、愛すべき國民である。佛詣ぼつぎや神詣かみまうてにかこつけて四國中をめぐり、大和をめぐつて、花を見て歩く事の出来る子供らしさを失はぬ民族である。西行といひ、芭蕉といひ、一生のなまけ者であつた。日本の秋を、日本の春を残る限かぎなく見盡したいが爲に、家業を捨て、歩きまはつた大きな子供である。

日本人程詩を作る國民は他にないであらうと誰でもいふ。私もさう信じてゐる。萬葉時代から日本人は花下かたかの行樂かうらくを無性むじやうに樂しむ事を知つてゐた。日本人は愛すべきなまけ者であつた。その中でも一番大きななまけ者が、西行と芭蕉とであつた。それから後の世の歌人や俳人たちには、分別ぶんべつくさい人たちが多過ぎてしまつた。其角きかくにしろ嵐雪あらしゆきにしろ、蕪村うらむらにしろ、分別ぶんべつがあり過ぎる。この事は、歌人の場合でもやはり同じ事だが、それはともかくとして、日本人がこれ程多く詩を作るといふ

分別ぶんべつくさい人  
わきまへを多  
しにもつたら  
しい顔をする

(一) 櫻本其角 中の  
蕉の一人者 三寶  
永四年 二二  
六十七年 癸卯  
四十七年 癸卯  
(二) 服部嵐雪 芭  
蕉の門人 芭  
永四年 癸卯  
五十四年 癸卯

あてやか

(一) 「さまん」の  
事思ひ出す櫻  
かな「芭蕉」

(二) 西行の「世を  
捨て、身はな  
きも雪の降る  
日は寒くこそ  
あはれ」の歌に  
芭蕉の「咲く日  
は浮れこそす  
れ」と附けた。

事は、やはり恵まれた日本の自然からであると思ふ。日本に櫻が咲く間は、日本人は恵まれてゐると思ふ。日本人は詩を作る事を忘れてはならない。  
譯もなく懐かしい櫻。譯もなく暖かい感じの櫻。譯もなく可憐な櫻。譯もなくあてやかな櫻。譯もなく哀れな櫻。譯もなく「さまざまの事思ひ出させる櫻。誰の爲に咲いてくれるのか、誰の爲に散つて行くのか、待たれる日のみ長くて、散る事の餘りに早い櫻。無常の實相を餘りに美しくも、餘りに傷ましくも私たちの心に刻みつけてくれる櫻。日本中の山も、原も、町も、今日は花の霞に包まれてしまつた。私は恵まれた日本を思ふ。  
西行も、芭蕉も、花の咲く、今は「浮れこそ」したであらう。  
今日は日本人に取つて一番明るい幸福の日である。と同時に、一番ものの哀れな日である。

(一) 詩人、小説家。  
治名は春樹、  
三年(二)五月  
縣に生れた。長野

六 晩春の別離

(一) 島崎藤村

時は暮れゆく春よりぞ  
また短きはなかるらん。  
恨は友のわかれより  
さらに長きはなかるらん。

五月九日

博地 月  
水漢公代 幾 (605)  
木國仙 R

佐保姫の春の  
くるま

君をおくりて花ちかき  
高樓までも来て見れば、  
みどりにまよふ鶯は  
霞むなしく鳴きかへり、  
しろき光は佐保姫の  
春のくるまを照すかな。

(一) 伊吹とも書く。  
近江と美濃と  
の境に聳えて  
三七メ一ト  
ル。七メ一ト

(三) 白河法皇。

これより君は行く雲と  
ともに都を立ちいでて  
おもへば琵琶の湖の  
岸の光にまよふとき、  
ひがし膽吹の山高く、  
西には比叡比良の峯、  
日は行きかよふ山々の  
ふかきながめを伏仰ぎ  
いかにすぐれし想をか、  
沈める波にたふらん。  
ながれはむなし法皇の

いづつては  
あはれかな



歌枕

波に千とせの色映る

(一)兵庫縣一播磨國明石市の南海岸  
(二)兵庫縣一播磨國一明石郡垂磨水と明石との中間

波のをどるを望む時、  
いかに胸打つ音たかく、  
君が血汐のさわぐらん。

または名に負ふ歌枕

波に千とせの色映る

(一)明石の浦の朝ぼらけ

松よろづよの音にひびく

(二)舞子の濱のゆふまぐれ

もしそれ海の雲落ちて

淡路の島の影くらく

さ霧のうちに鳴きかよふ

千鳥の聲を聞く時は

雲が海近くたれ

ひめぐと

いかに浦邊にさすらひて、  
遠き昔をしのぶらん。

げに君がため山々は

雲を停めん、浦々は

磯にながる、白波を

あげんとすらん。よしさらば、

旅路遙かに野邊行かば

野邊のひめぐと、森行かば

森のひめぐと探りもて、

高きに登り、あめつちの

もなかに遊び、大川の

ながれをきはめ、山々の

和名後を傳へし藤村詩歌  
朽ちせぬ琴をかきならせ

神をもよばひ、谷々の  
鬼をもおこし、歌人の  
魂をも遠く返しつゝ、  
清しき聲をうちあげて、  
朽ちせぬ琴をかきならせ。

さらば名残は盡きずとも、  
たもとを分つ夕まぐれ、  
見よ、影ふかき欄干に、  
けむりをふくむ藤の花。  
北行く雁はおほ空の  
霞に沈み鳴きかへり、  
彩なす雲も愁へつゝ、

君を送るに似たりけり。

あゝ、いつかまた相逢うて  
もとの契をあたくめん。  
梅も櫻も散りはてゝ、  
すでに柳はふかみどり、  
人はあかねど、行く春を  
いつまでこゝにとむべき。  
われに惜しむな、家づとの  
一枝の筆の花の色香を。

—藤村詩集—



れた基で、當時に於ける我が文化の變化は、明治維新に際し、歐米の影響を受けて變化したよりも、更に著しく大陸文化に化せられた事であらう。大和の法隆寺や、その寶物を見ると、當時の盛觀がしのばれるのである。

次の奈良時代は、いはゆる天平期を最盛時代として、建築にも、彫刻にも、共に驚くべき進歩發達を遂げた。これ即ち唐朝の進んだ文化が、直接我が國にはいつたからである。抑、推古天皇時代の美術が、一躍して奈良時代の美術になるには、その變化が餘りに大き過ぎるけれども、支那では六朝式から唐朝式となるには、隋といふ過渡期を経て居るのに、我が國では六朝式を朝鮮から入れて、次に直接に唐の美術を輸入したので、推古天皇時代と奈良時代との間に、著しい相違を來したのである。唐の文化がはいれば、世はまた直ちにこの新文化を追うて、すべての建築、調度の類から、日常生活に至る

(一) 第四十五代聖武天皇の御代  
一三〇八年

(二) 六朝の次の時  
九年、西紀五八

(三) 我が第三十三代推古天皇の御代  
一八九年、西紀六二

まで唐風になつたのであらう。尤も、かやうな風潮に乗じたのは、主としてその當時に於ける宮廷及び貴族のみであつて、足一歩都會を離れ、ば、國民の文化はなほ低かつたのであらうが、とにかく唐



傳定朝作鳳凰堂本尊阿彌陀如來

朝文化の影響によつて、我が文化の根柢は益、堅くなつたのである。

平安時代の初期はまだ唐の影響を受けてゐたが、その中期からは日本國民としての自覺心が次第に旺盛になり、遂に外國文化から離れて、我が特色ある文化を成すやうになつた。これ實に我が文化の尊い所以である。この頃から國文學が起つて、漢文學に對立するやうになり、藤原期に入つて我が國文學は絶頂に達し

精能

(一)佛師第六代から第六代まで  
第一條の頃(天徳元年)  
第六條の頃(天徳元年)  
第十條の頃(天徳元年)  
第十八條の頃(天徳元年)



源氏物語繪卷(傳藤原隆能筆)

(二)定朝

定朝が出て、次いで鎌倉時代に運慶、湛慶が出るに及んで、彫刻界に

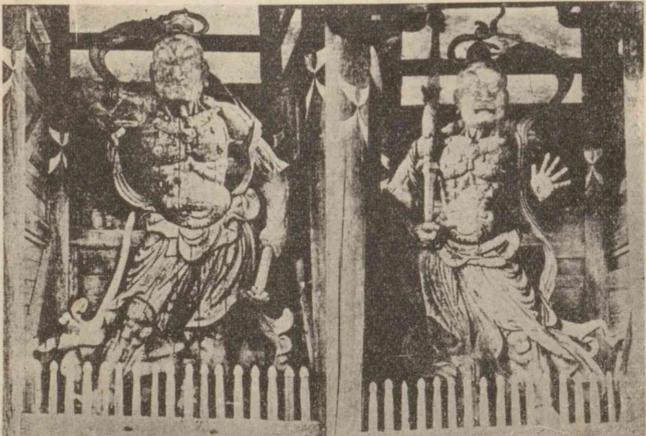
た。これに伴なつて美術に於ても、支那には見る事の出来ない特殊な流風が起り、遂にこれを日本的に大成した。して見ると我が文化は、早く古代にその基礎を置いたのであるが、推古天皇時代と奈良時代とに外國の影響を受けて著しい進歩を遂げ、それを純日本化して、我が國獨得の精華を發揮するやうになつたのは、平安及び鎌倉初期であると、言ふ事が出来る。

彫刻に就いて言へば、天平時代はその精を極め、能を盡してはゐるが、これ實に唐の影響である。然るに平安時代の終りに

一大進展を來し、茲に純日本彫刻が出現した。

またこれを繪畫の方で考へれば、早く佛畫は精妙な域に達してはゐるが、平安時代に國文學の發達に關聯して、純鑑賞的の繪畫が現れた。この流は、平安時代の末から鎌倉初期に至つて益々榮え、遂にいはゆる大和繪の一體を成すやうになつたのである。

然るにその後、鎌倉時代の末から足利時代にかけて、美術界に特殊な一派を生じた。即ち支那からはいつて來た宋元水墨畫の一體で、禪宗趣味と關聯して、我が美術に一新



東大寺南大門仁王像

精妙  
鑑賞的





きな相違を生ずるであらう。實に國民性が國土に支配される事は、蓋し少くない事であらうし、美術もまたその國土の恩恵に浴する事は、蓋し莫大であらう。美術上に於ける自然模倣は頗る重要視されるが、自然模倣の上には、國土の恩恵を最も考慮すべきである。國土が一國文化の上に及す力が偉大であつて、國民性もその支配を受け、美術もまた國土の恩恵に浴すとすれば、推古天皇時代や、奈良、室町の時代に外國美術の影響を受けて、その内容や形式の上に大きな變化を受けても、若干の時を過ぎれば、その國土固有の特色に復るのは疑のないところで、以上述べた事實がよくこれを證明してゐる。これ美術がその國々によつて異なり、時を異にすればまたその美術にも大なる相違を來す所以である。しかもその間に動かすべからざる脈絡をもつのは、即ち國土の力と、その中に動いてゐる國民性の力とによるのである。

八 奥の細道 その一

松尾芭蕉

月日は百代の過客にして、行交ふ年もまた旅人なり。船の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を棲所とす。古人も多く旅に死せるあり。余も何れの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思やまず。海濱にさすらへ去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招にあひて、取る物手につかず。股引の破れを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸もすみかはる代ぞ雛の家

彌生も末の七日、曙の空朧々として、月は有明にて光をさまれる

(一)江戸時代の俳人。名は宗房。俳聖と言はれる。伊賀の人。元禄七年(一七〇〇年)歿。三十四年(一七〇九年)歿。五十一(一七二六年)歿。  
 (二)夫天地者萬物之逆旅、光陰者百代之過客云々。(李白、春夜宴桃李園序)  
 (三)元禄元年(一七〇〇年)三十八年(一七〇三年)歿。  
 (四)鯉屋杉風。杉門人。芭蕉の山人。享保十七年(一七四六年)歿。六十八年(一七五三年)歿。六間江に深川六間江にあつた。

(一)今の東京市上野公園から西北に續く地。  
(二)東京市足立區奥州街道最初の宿驛。

矢立の初として

(三)埼玉縣北足立郡奥州街道の宿驛。

ものから、富士の峯かすかに見えて、上野、谷中(ヤナカ)の花の梢、またいつかはと心細し。陸ましき限りは宵より集ひて、船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里の思胸に塞がりて、幻の巷に離別の涙をそゞぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は涙

これを矢立の初として、行く道なほ進まず。人々は途中に立並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚唯かりそめに思ひ立ちて、吳天に白髪(ハクハツ)の恨を重ぬと雖も、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、若し生きて還らばと、定めなき頼の末をかけ、その日漸く草加(カサカ)といふ宿にたどり著きにけり。瘦骨の肩にかゝれる物先づ身を苦しむ。唯身すがらにといてたち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨、筆のたぐひ、あるはさり難き餞などしたるは、流石(リウシ)にうちすて難くて、路次

の煩となるこそわりなけれ。

卯月朔日、日光山に詣拜す。往昔この御山を二荒山と書きしを、空

海上人開基の時、日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今この御光一天に輝きて、恩



澤八荒に溢れ、四民安堵の栖(すま)おだやかなり。なほ憚多くて、筆をさしおきぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

心もとなき日數重なるまゝに、白河の關にかゝりて旅心定まりぬ。いかで都へと便り求めしも理なり。中にもこの關は風騷(フウサウ)の人、心

(一)「たよりあらばいかで都へつげやらんけふ白河の關は越えぬと拾遺集、平兼盛風騷の人



(一) 禪僧。土佐の人。萬治二年(一三一九年)寂、年七十八。

風雲の中に旅寝す

(二) 姓は山口、名は信章。甲斐の巧みであつた。芭蕉の友。享保元年(一七二〇年)歿。年七十五。  
(三) 醫者。芭蕉の友人。江戸の人。芭蕉の友人。中川。美濃の門人。

盡さん。  
雄島が磯は地續きて、海に出てたる島なり。雲居禪師の別室の跡、坐禪石などあり。はた松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穂、松毬などうち煙りたる草の庵閑かに住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立寄る程に、月海に映りて、晝の眺また改りぬ。江上に歸りて宿を求め、風雲の中に旅寝すること、怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほとゝぎす

曾良

余は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵を別るゝ時、素堂松島の詩あり。原安適、松が浦島の和歌を贈らる。袋を解いて今宵の友とす。且杉風、濁子が發句あり。

九 奥の細道 その二

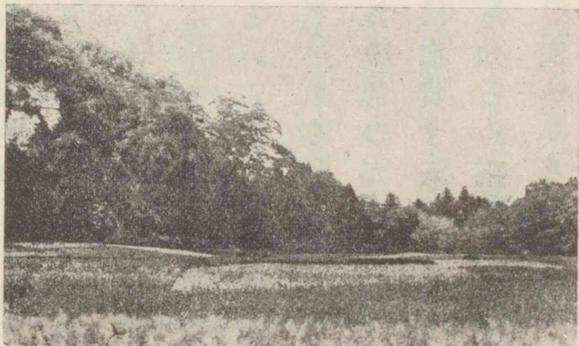
(一) 五月。

雉兎芻蕘  
(二) 今宮城縣石巻市。  
(三) 「すめろぎの御代榮えんとあづまなるみちのく山にこがね花さく」(萬葉集、大伴家持)  
(四) 同縣桃生郡橋浦村。  
(五) 同縣牡鹿郡稻井村の字。  
(七) 同縣登米郡新田村新田沼。  
(八) 同郡登米町。  
(九) 藤原清衡、基衡、秀衡。  
(一〇) 平泉館址。奥の御館。

(一) 十一日、瑞巖寺に詣づ。當時三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。その後、に雲居禪師の徳化によりて、七堂葺改りて金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。

十二日、平泉へと志す。聞傳へたる姉葉の松、緒絶の橋など人跡稀に、雉兎芻蕘の行交ふ路、そこともわかず。終に路ふみたがへて、石巻といふ湊に出づ。黄金花咲くと詠みて奉りたる金華山海上に見わたされ、數百の廻船入江に集ひ、人家地を争ひて、かまどの煙立續きたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿借らんとすれど、更に宿貸す人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、あくればまた知らぬ路迷ひ行く。袖の渡、尾駁の牧眞野の萱原などよそめに見て、遙かなる堤を行く。心細き長沼に沿うて、戸伊摩といふ所に一宿して、平泉に至る。  
(二) 三代の榮耀一睡のうちにして、大門の跡は一里此方にあり。秀衡

(一)秀衡が作った山、平泉鎮の金雞山、雄に埋めたとはいふ。  
 (二)衣川館。義經の居館。  
 (三)奥州北部の稱、盛岡市附近から北部へかけて言ふ。南部氏が奥州に封ぜられてから起つた名である。  
 功名一時の叢となる。  
 (四)泉三郎忠衡の居館。  
 (五)杜甫の「春望」の詩句。「春望」



が跡は田野になりて、金雞山のみ形をのこす。先づ高館(一)に上れば、北上川(二)南部より流る、大河なり。衣川は泉が城を遶りて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春川にして草青みたりと、笠うち敷きて、時の移るまで涙を落し侍りぬ。

○夏草やつはものどもが夢の跡  
 かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢となるべきを、四面

(一)今山形縣東村に山形山寺村にある。俗に山寺とも言ふ。  
 天台宗。  
 (二)同縣北村。山郡尾花澤町。

(三)今の山形市の邊を指したのであらう。  
 (四)基点。今北村。山郡西郷村の西。  
 (五)準瀬。同郡大高根村の南。  
 (六)同縣最上郡と東田郡との境。高き六三〇メートル。  
 (七)今同縣酒田市。義經の臣常陸坊海存を祀る所といふ。

新たに圍みて、薨を覆ひて風雨を凌ぎ、暫く千歳の記念とはなれり。

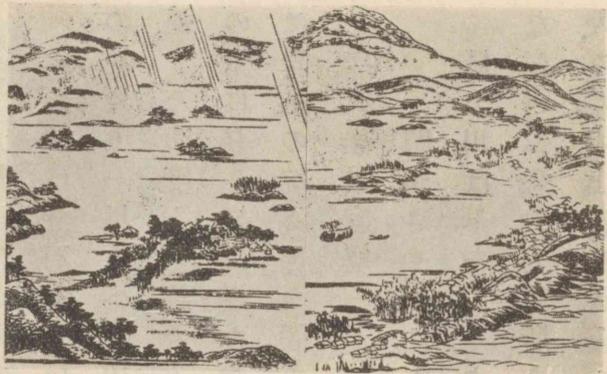
五月雨のふりのこしてや光堂

山形領(一)に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべき由人々の勸むるによりて、尾花澤(二)よりとつて返す。その間七里許なり。日未だ暮れず、麓の坊に宿借り置き、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年舊り、土石老いて苔滑かに、岩上の院々扉を閉ぢて物音聞えず。岸をめぐり岩をはうて佛閣を拜し、佳景寂寞として、心澄行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川はみちのくより出でて山形を水上とす。こてん(三)はやぶさなどいふ恐しき難所あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船をおろす。これに稻積みたるをやいな船といふならし。白絲の瀧は青葉のひまゝ(四)に落ちて、仙人堂岸

に臨みて立つ。水漲りて船危し。



芭蕉翁繪詞傳所載

○五月雨を集めて早し最上川  
江山水陸の風光數を盡して、今象瀉に  
方寸を賣む。酒田の湊より東北の方、山を  
越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その間十  
里。日影や、傾く頃、汐風眞砂を吹上げ、雨  
朦朧として鳥海の山隠る。闇中に摸索し  
て雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色ま  
たたのもしと、あまのとま屋に膝を容れ  
て、雨の晴るゝを待つ。

島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向ふの岸にあがれば、花

(一)能因法師が閑居の跡と言傳へる。  
(二)一きさがたの櫻は波にうづもれて花の上こぐあまのつり舟(西行法師)

(一)今宮城縣柴田郡笹谷峠の附近。郡小砂川から鮎海郡吹浦へ越える所。此所は後者。  
(二)今の秋田市。

(三)山形縣と新潟縣との境。越後國に屬し、越中、國に對する。

の上漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。この寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼のうち、に盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築いて、秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて、浪うち入るゝ所を汐越といふ。江の縦横一里許、面影松島に通ひてまた異なり。松島は笑ふが如く、象瀉は恨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。

象瀉や雨に西施がねぶの花

酒田のなごり日を重ねて、北陸道の雲に望み、遙々の思胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。鼠の關を越ゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國いちぶりの關に至る。この間九日、暑濕の勞に神を惱まし、病起りて事を記さず。

○荒海や佐渡に横たふ天の川

（一）英文學者、  
學博士。京都  
大學。大正十  
四年。卒。年四  
十四。

一〇 東西自然詩觀

（一） 厨 川 白 村

外國から儒佛の思想を輸入する前の日本人は、ギリシヤ人のやうに、人間味を中心にした文學を持つてゐた。上古は固よりのこと、萬葉集の詩人にも、人事を歌つた人が多かつた。かの山上憶良の如き、多く花鳥風月を詩材とせずして、今日の社會問題とも謂ふべき貧窮問答歌の如きを得意とした作者があつた。

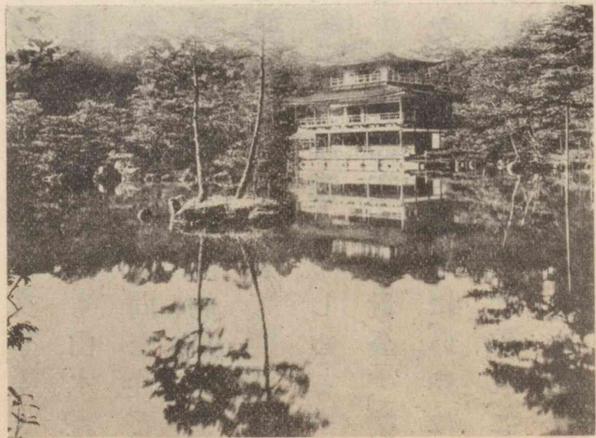
ところが後の古今集となると、歌の數量から見ても、自然が最も重要な題材となつてゐる。元來、日本はギリシヤのやうに氣候も良く、風光明媚の國である爲、自然美に親しみ、それに馴れて、さ程に心を動かされなかつたといふ點もあらう。それが、自然を讚美する事の多い支那文學の感化を受け、やうになつて後、それまでは比較的冷淡であつた自然の美に對して、眞に目覺めるに至つたのだとい

畫中の點景

ふ説に、私は一理あると思ふ。萬葉以後の日本詩人が、支那文學に刺戟され啓發されて、自然美を歌ふやうになつてからは、文學もまた支那の文人畫に見るやうに、漁夫とか仙人とか、いつも山水畫中の點景に用ひられてゐると同じく、自然を主として人間を従とする有様となつた。しかし日本の自然は、支那の如く大陸的の雄大な、嶮奇な、人をして畏怖せしめるものではなく、溫雅にして瀟洒な、晴やかな、愛すべく親しむべきもので、人をして陰鬱ならしめるやうな景色は甚だ少い。殊に平安朝文學などは、宮廷臺閣の貴公子、櫻かざして今日も暮しつ。といふ大宮人の文學であるだけに、いかにも暢氣で、悲痛深刻の調がなく、自然に對してたゞその美に憧れ、これを讚歎し、これを謳歌するといふ傾向のみ旺にした。後にそれが更に支那傳來の仙人趣味となり、鎌倉時代に入つて、宗教的な禪味といふ分子を加へ、雅趣とか、俳味とか、風流とかいふ西洋人の殆ど

行住坐臥  
造次顛沛

理解し得ない詩情を、山川草木、花鳥風月の世界に見出すに至つたのだ。いかに殺風景沒趣味な者でも日本人たる以上、不思議にも苔むした庭石とか、月下の蟲聲とかい  
つたやうな、西洋人の鑑賞力の及び  
得ない高雅な自然美を解し得るの  
は、全く右に述べたやうな歴史的關  
係からだと思ふ。  
西洋人は自然に對してゐながら  
も、行住坐臥、造次顛沛も、人間といふ  
ものゝ忘れられない人種である。彼  
等は庭を造るにも、木を植ゑるにも、  
其所に強ひて人工を現し、人間とい  
ふものを出して見せなければ、承知が出来ないのである。幾何學的

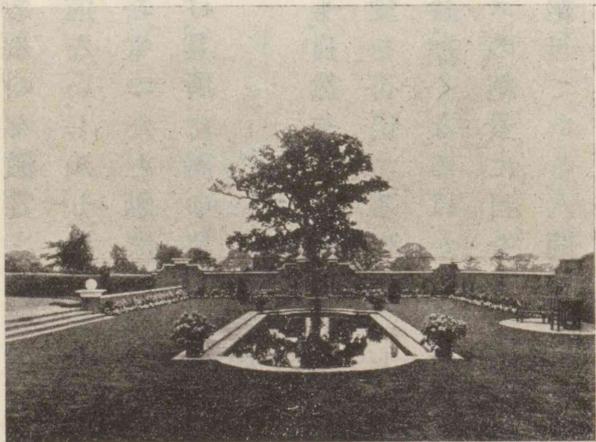


日本式庭園(金閣)

人間を隠す

の線で路や芝生や花島を仕切り、散髪屋で丁稚の頭を刈込むやうに、植木の手入れをしなければ成つて  
ゐないと心得てゐる。枝を矯め葉を  
透しても、わざ／＼人間を隠して、忠  
實に自然の姿態を學ぼうとする東  
洋風とは、全く正反對の行き方だ。日  
本の活花と西洋の花束とを比べて  
も同じ感がある。

東洋人は自然に對する時、其所に  
人間味の強く出てゐる事を俗だと  
して斥けた。仙骨を帯びた支那の詩  
人の中に白樂天を見出して、その詩を俗なりと評する者は東洋の  
批評家である。嘗てラフカヂオ・ハーン先生の英文學の講筵に侍し



西洋式庭園

(一)支那、唐の詩人。  
(二)小泉八雲のこと。  
講筵に侍する

(一)イギリスの明治三十四年(一八七一年)に日本政府に招聘された。

たところ、先生がオールドリッチの「紅葉」と題する四行詩を引用して、梢に一枚の葉が散残つた状を、死にかけてゐる慾深爺が、指尖に貨幣を持つてゐるやうだと形容してあるのを激賞された事がある。表現法としてはいかにも巧妙に相違ない。しかし、私ども東洋人には、この四行詩が詩に成らない程俗なものだと思はれる。東洋人は、人間を離れる事が深ければ深いだけ、其所に誠の詩が見出されるのだと感ずるからだ。

東洋の厭世詩人は、人間を棄て、自然を棄てようとはしない。宗教生活に入つても、自然に對する愛を否定する事は決してなかつた。否、否定しないのみか、その愛は益、深くなるばかりであつた。西洋の中古の一高僧が、わざ／＼スイスの絶景に目をそむけて通つたといふやうな例は、東洋に於ては絶無である。人間を厭離して自然の懷に抱かれ、其所に宗教味が加つて、東洋の自然趣味が成立し

人間を厭離して自然の懷に抱かれる

(一)イギリスの詩人。西紀一七八八年(一七二四年)

(二)「ねがはくは花のものとて春死なんその望きさらぎの望月の頃」

たとさへも考へられる。西洋では人間を厭ふ餘り、自然を懷かしむに至つたバイロンの厭世詩人が出來たのは、浪漫主義勃興以後の事で、最近僅かに百年前の例ではないか。世を厭ひ、妻子を棄て、も西行法師はなほ自然を愛し、風月を友として、「花のもとにて春死なん」と歌つたのである。

一 詩の心

吉田絃二郎

詩をもたぬ人の生活程淺膚なものはない。詩とは文字の上に表された、或は文學上のいはゆる詩のみを指して言ふのではない。詩とはすべての生活表現の根柢的要素を意味する。生活に於ける詩とは、生活の背景をなすところの最深所を指すのである。詩はすべての表現の基調であり、生命であり、光であり、力である。

詩は無限その物の端的な表現である。私たちは悠久その物の相に就いては知る事が出来ない。しかしながら私たちは、ある機會にある機縁によつて、刹那的に悠久その物の相を觀ずる事が出来る。その刹那的な觀照の世界に映つて來る實在の相を實感するものは詩である。

哲學にも散文にも詩がなければならぬ。言換へれば、哲學者も、小説家も、美術家も詩人でなければならぬ。なぜならば、詩はすべての人間の行爲の最深所に生きてゐるものだからである。

眞に生きん事を欲する人間は、すべて詩人でなければならぬ。詩人はいつも最深所を目あてとして生きるものであるから。

詩は神の心である。最も淨化された人間の心である。詩をもたぬ人間は俗人である。

私は詩をもたぬ哲學を憎む。詩をもたぬ文學を憎む。詩をもたぬ

詩を憎む。詩をもたぬ俗人の生活を悲しむ。

學問をするといふ事は大切な事である。しかし、學問が唯單に功利的な考にのみ支配されてゐるならば、その學問は尊敬される事はない。それは俗人の學問である。

醫學も、法學も詩をもつてゐなければならぬ。でなければそれは俗人の學問に墮してしまふ。

勤勉な農夫の生活にも詩はある。否、勤勉な農夫こそ最も詩に恵まれた生活をもつてゐるはずである。

彼は誰よりも自由である。彼は誰よりも日の光と、微風と、青空と、小鳥の聲とを恵まれてゐる。彼は誰よりも大地その物を恵まれてゐる。

俗人に取つては、日の光や、微風や、青空は何でもないであらう。それ等のものの眞の價值を知る人に取つては、それは高い塔や都會

の美よりも、もつと深い本質的な美をもつてゐるはずである。一莖の草の葉の搖ぎにも詩はある。嬰兒の微笑にも詩はある。これ等の不可思議な詩を見出す事の出来ないのは、その人の心が曇らされてゐるからである。詩人は最も澄んだ心の所有者でなければならぬ。詩人は嬰兒の魂をもつた者でなければならぬ。詩人はかしの葉の戦ぎに神の言葉を聴く事の出来る者でなければならぬ。最も澄んだ心をもち、嬰兒の心をもつた人間でさへあるならば、彼は立派な詩人である。文字で表された詩を書綴るといふ事は、第二義的な仕事である。一番大切な事は、詩人の心をもつといふ事である。たとひ一生唯一行の詩をも綴らぬ農夫の中にも、立派な詩人はあるべきはずだ。立派な哲學者、立派な學究、立派な工匠、立派な農夫は皆詩人である。

第二義的

私たちは偶然にも、一つの人生といふものを賦へられた。この無限絶對の人生に就いて、私たちは果してどれだけ思を潛めた事があるか。生活上の諸相に就いて眞劍に、根柢的に考へる事のうちに詩がある。考へるといふ事は苦痛であるに違ない。しかし、その苦痛の中にこそ、一層彼を深くし、彼の生活を嚴肅化するところの詩がある。學問をするといふ事の第一の目的は、私たちの生活を深くするといふ事ではなければならぬ。私たちの生活を嚴肅化するといふ事は、俗人と詩人との差は、私たちに賦へられた人生その物の價值を低く見積るか、或は絶對的のものに見積るかにある。俗人に取つては、人生は唯一つの手段に過ぎない。詩人に取つては、人生は絶對のものである。

詩人に取つてのみこの世界は神の國となつて現れる。俗人は物慾と虚偽と排擠との中に生活を苦しみ、詩人は神と偕に呼吸し、神と偕に欣ぶ。

人は神と偕に生きる事を考へなければならぬ。いつも自分等の生存の最深所に就いて考へなければならぬ。

私たちは永劫の時を通じて、この刹那の生存をのみ恵まれてゐる。實際、人間に取つて、この人生は無限な自然の恵である。絶対の機縁である。絶対値の生存である。

この最上絶対の機縁を心ゆくまで感謝もし、實感もするのが詩の心である。全身の血を躍り立たせる程に、生きてゐる事の有難さを感じようとするのが詩の心である。これ程の突詰めた心で、白熱的な思念で生活に面する眞剣さが詩の心である。

いつも私たちは心を若々しく持つてゐなければならぬ。嬰兒は

木の葉を戦がせる微風にも驚異の眼を見張る。私たちは生活の諸相に對して、自然の一つ／＼の表れに對して、いつも嬰兒が感ずるやうな驚異を感じなければならぬ。

私たちはいつも人生に對して、燃ゆるやうな熱心さをもつてゐなければならぬ。生悟りであつてはならぬ。死ぬ日まで人生に對する眞剣な努力を失つてはならぬ。人生に面する時、私たちの心はいつも無邪氣な若者でなければならぬ。

若者はよく笑ひ、よく泣き、よく憤り、よく躍る。人生に對して私たちは、いつまでも正直に笑ひ、正直に泣き、正直に憤り、正直に躍らなければならぬ。

詩の心は其所から生れて来る。

人間は年を取るにつれて自然に魂の美しさを曇らされ易い。ある者は社會的空名にある者は富といふものにある者は權勢に自

第一義的

分の魂の美しさを賣つてしまふ。  
青年のみがいつも人間の魂の美しさを保つてゐる。老いてもなほ青年の魂の美しさを保つ事の出来るものは詩人である。  
どれ程長く人生を生延びたかといふ事は第二第三の問題である。

どれ程美しく人生を生き得たかといふ事が第一義的な問題である。  
——わが詩わが旅——

一二 源三位

抑この源三位入道頼政は攝津守頼光に五代三河守頼綱が孫、兵庫頭仲政が子なりけり。保元の合戦の時も御方にて先を駆けたりしかども、させる賞にもあづからず、また平治の逆亂にも、既に親類を捨てて参じたりしかども、恩賞これおろそかなりき。大内の守護

(一)治承四年(一八四〇年)宇治に戦死した、年七十七。  
(二)滿仲の長子。

にて年久しうありしかども、昇殿をばゆるされず。年たけ齡傾いて後、述懐の和歌一首詠みてこそ昇殿をばしたりけれ。

人知れぬおほうち山の山守は

木がくれてのみ月を見るかな

これによつて昇殿をゆるされ、正下、四位にて暫くありしが、なほ三位を心にかけつゝ、

のぼるべきたよりなき身は木のもとに

しひをひろひて世をわたるかな

さてこそ三位はしたりけれ。やがて出家して、源三位入道頼政として、今年七十五にぞなられける。

この人一期の高名と思しき事は多きが中にも、殊には仁平の比ほひ、近衛院御在位の御時、夜な〜おびえさせ給ふ事ありけり。有驗の高僧貴僧に仰せて、大法、祕法を修せられけれども、その驗なし。

一期の高名  
(一)第七十六代近衛天皇。

(一)第七十三代堀河天皇。

鳴弦

御惱は丑の刻ばかりの事なるに、東三條の森の方より黒雲の一叢立來つて、御殿の上に蔽へば、必ずおびえさせ給ひけり。これによつて公卿僉議ありけり。去んぬる寛治の比ほひ、堀河院御在位の御時、主上しかの如くおびえたまぎらせ給ひけり。その時の將軍義家朝臣、南殿の大床に候はれけるが、御惱の刻限に及びて鳴弦する事三たびの後、高聲に「前の陸奥國、守源義家」と名のりたりければ、聞く人身の毛よだつて、御惱必ず怠らせ給ひけり。然れば則ち先例に任せて、武士に仰せて警護あるべしとて、源平兩家のつはものうちを選ませられけるに、この頼政をぞ選み出されたりける。その時は未だ兵庫頭にて候はれけるが、申されけるは、「昔より朝家に武士を置かるゝ事は、逆反の者を退け、違敕の輩を滅さんが爲なり。目にも見えぬ變化の物仕れと仰せ下さるゝ事、未だ承り及ばず」と申しながら、敕宣なれば召に應じて參内す。頼政、頼みきつたる郎等、遠江國の



源三位高勳谷筆

〔一〕雅兼の子。中納言正三位。

住人猪早太に、母衣の風切はいだりける矢負はせて、唯一人ぞ具したりける。我が身は二重の狩衣に、山鳥の尾をもてはいだりける。鋒矢二筋、滋籐の弓に取添へて、南殿の大床に伺候す。頼政矢二つ手扱みける事は、雅頼卿その時は未だ左少辨にておはしけるが、變化の物仕らんずる仁は頼政ぞ候らん」と選み申されたる間、一の矢にて變化の物射損ずる程ならば、二の矢には雅頼辨のしや頸の骨を射んとなり。案の如く日比人の申すにたがはず、御惱の刻限に及んで、東三條の森の方より、黒雲一叢立來つて、御殿の上になびいたり。頼政きつと見上げたれば、雲の中に怪しき物の姿あり。射損ずる程ならば、世にあるべしとも覺えず。さりながら矢取つて番ひ、南無八幡大菩薩と心のうちに祈念して、よつ引いてひようと放つ。手答してはたと中る。得たりやおう」と、矢叫をこそしてんげれ。猪早太つと寄り、落つる所を取つて押へ、柄も拳も透れくと、續け様に九刀ぞ

ぬえ鶴

(一)藤原頼長。

刺したりける。その時上下手ん手に火を點して、これを御覽じ見給ふに、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにして、鳴く聲ぬえにぞ似たりける。怖しなども愚かなり。主上御感の餘りに、獅子王と申す御劍を下さる。宇治の左大臣殿これを賜はりついで頼政に賜はんとて、御前の階を半ばかりおりさせ給ふをりしも、頃は卯月十日餘りの事なれば、雲居に杜鵑二聲三聲音づれて通りければ、左大臣殿

ほとゝぎす名をも雲居にあぐるかな

と仰せられかけたりければ、頼政右の膝を突き、左の袖を廣げて、月を少しそば目にかけて、

弓張月のいるにまかせて

と仕り、御劍を賜はりて罷り出づ。この頼政卿は武藝にも限らず、歌道にもまた勝れたりとぞ、時の人々感じあはれける。さてかの變化

(一)第七十八代二條天皇。

の物をば、うつぼ船に入れて流されけるとぞ聞えし。

また應保の比ほひ、二條院御在位の御時、ぬえといふ化鳥禁中に鳴いて、屢、宸襟を惱まし奉る事ありけり。然れば先例に任せて、頼政をぞ召されける。頃は五月二十日餘り、まだ宵の事なるに、ぬえ唯一聲音づれて、二聲とも鳴かざりけり。目ざすとも知らぬ闇ではあり、姿形も見えざりければ、矢壺をいづくとも定め難し。頼政が謀に、先づ大鎗取つて番ひ、ぬえの聲したりける内裏の上へぞ射上げたる。ぬえ、鎗の音に驚いて、虚空にしばしぞひらめいたる。次に小鎗取つて番ひ、ひいふつと射切つて、ぬえと並べて前にぞ落したる。禁中さざめきわたつて、頼政に御衣をかげさせおはします。今度は大炊御門の右大臣公能公これを賜はりついで、頼政にかづけさせ給ふとて、昔の養由は雲の外の雁を射き、今の頼政は雨の中のぬえを射たり」とぞ感ぜられける。

かづく

(二)權大納言藤原實能の子。  
(三)支那春秋時代の楚の射術の名人。

(一)今京都府中郡五箇村。  
(二)今福井縣遠敷郡宮川村。

五月やみ名をあらはせる今宵かな  
と仰せられかけたりければ、頼政  
たそがれ時もすぎぬとおもふに  
と仕り、御衣を肩に掛けて罷り出づ。その後伊豆國賜はり、子息仲綱  
受領になし、我が身三位して、丹波の五箇の庄、若狭の東宮川(二)を知行  
して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛起いて、宮をも失ひ參  
らせ、我が身も子孫も滅びぬるこそうたてけれ。

—平家物語—

自修文

文學と氣品

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人  
から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國は、そ  
の國の品格も一段と高く見え、文學の嗜たしなみがある偉人は、一入懐か

(一)字は孟德、國勢を得て魏の王となつた。後漢の獻帝の建安二十五年(西紀二〇〇年)歿。  
(二)曹操「短歌行」の詩句。  
(三)頼光の弟。永承三年(一〇七三年)歿。  
(四)岩手縣膽澤郡衣川村。  
情致 おくゆかしい

韻事  
風流な事がら。

しい心持がする。魏の曹操はその事功の上から見ては、餘り好かれぬ人物であるが、(一)「樂を横たへて、月明らかに星希に」と歌つた一事を想ひ出すと、何となく慕はしくさへなつて來る。

源頼光や頼信よりも、八幡太郎義家の方が偉く思はれるのは、勿來關に馬を停めて、吹く風をなこそその關とおもひしに、道もせに散る山ざくらかな(二)と詠んだ風流、衣川に矢を番へて「衣のたてはほころびにけり」と呼止めた情致がある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝、義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の「しひをひろひて世をわたるかな」は餘り感心せぬが、「弓張月のいるに任せて」埋木の花さくこともなかりしに、みのなるはてぞあはれなりける(三)などの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、とても世にながらふべくもあらぬ身の、かりの契をいかで結

(一)清盛の父。鳥羽上皇に寵せられたが、群臣の嫉まれ、豊明の節會に身取られた。辱められた。

(二)平清盛。



右大臣實朝(松岡映丘筆)

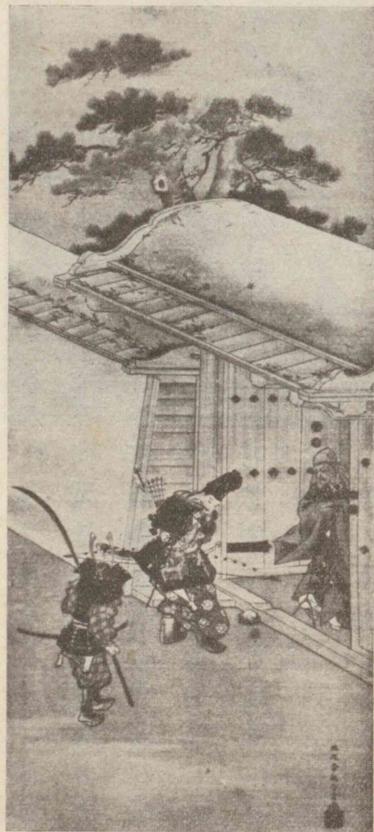
ばんの歌と「かへらじとかねておもへば梓弓なき數にいる名をぞとむる」の辭世とである。平忠盛に、有明の月もあかしの浦風に、波ばかりこそよると見えしかの風流があつて、眇の俄殿上人も、優に優しい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の陸奥のいはてしのぶはえぞ知らぬ書きつくしてよつぼの石ぶみを思へば、義經や範頼を殺す程の人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流談が混つてゐたらうと想像される。

その子實朝に至つては更に歌の名手。これは源氏の武將中の

曩祖。先祖。霸業。諸侯の首領たる事業。

末路。公達。親王、攝家、清華などの貴族の子弟。

第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、茲に最大の發達を遂げてゐる。頼朝の霸業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流談のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。



平忠度(小堀柄音筆)

實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾る者は忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗りかへして俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗

語草 話のたね。  
 家訓 家のをしへ。  
 院宣 院中の有司が下知する文書。  
 (一) 文祿三年(一六二四年)二月二十五日、秀次、前田利家、康、吉野に赴いて花見をした。  
 (二) 「九月十三夜」の詩句。  
 襟度 人の容れる度量。  
 (三) 上杉謙信の臣。元和五年(一六二〇年)九月、歿。  
 風采 人がら。  
 理想 思ひ慕ふこと。  
 典型 ぼん。

しい永久の語草である。  
 武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなく  
 てはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事からである。そ  
 れであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が随分多か  
 った。承久の役に院宣を読み得る人がなかつたなどといふのは、  
 眞の武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆  
 和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大  
 間違。吉野の花見には諸大名もまたそれ、詠歌をものしてゐ  
 る。上杉謙信が「霜滿軍營」の詩吟は、人をして先づこれに同情せし  
 める所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最  
 大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采  
 を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と  
 見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となく物足  
 らない心地がする。梶原景時、明智光秀の時にとつての連歌など

(一) 賦中作の詩句。  
 (二) 名は醇。山陽の第三子。安陽政六年(一五九一年)斬られた。年三十五。  
 (三) 辭世の詩句。  
 (四) 名は啓。信濃松代藩士。元治四年(一八六二年)攘夷黨の爲に斬られた。年五十四。  
 (五) 京都清水寺の僧。安政五年(一八二四年)薩摩に入水。年四十六。  
 (六) 通稱六郎。攝津の人。元治五年(一八六三年)刑死。年五十二。  
 (七) 野村もと。應三年(一八二七年)歿。年六十二。  
 (八) 慶應三年(一八五二年)歿。年五十二。

が、稍その憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。  
 幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩  
 や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病床、兒叫飢」  
 橋本景岳の「誰知松柏後凋心、頼三樹三郎の誰題」  
 日本古狂生をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰  
 でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼て  
 も、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられ  
 ないやうになつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂  
 へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯  
 となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、



佐久間象山(池上秀畝筆)

一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古、人の情緒を動かすであらう。

一三 小松内府 その一

(一)太政大臣平清盛

太政入道はかやうに人々數多縛め置きても、なほ心ゆかずや思はれけん、既に赤地の錦の直垂に、黒絲をどしの腹卷の白金物打つたる胸板せめ、先年安藝守たりし時、神拜のついでに靈夢を蒙つて、嚴島大明神よりうつゝに賜はられたりける銀の蛭卷したる小長刀常の枕を放たず立てられしを脇に挟み、中門の廊にぞ出でられたる。大方その氣色ゆゝしうぞ見えし、貞能と召す。

(二)清盛の叔父忠正  
(三)崇徳上皇

筑後守貞能は木蘭地の直垂に緋をどしの鎧著て、御前に畏まつてぞ候ひける。入道宣ひけるは、いかに貞能、この事いかゞ思ふぞ。保元(二)に平右馬助を始めとして、一門半ば過ぎて新院の御方に参りに

(一)崇徳天皇の第一皇子重仁親王  
(二)清盛の父忠盛  
(三)鳥羽法皇  
(四)一一一九年  
(五)藤原信賴  
(六)源義朝  
(七)藤原經宗  
(八)藤原惟方

(九)藤原成親  
(一〇)藤原師光  
入道して西光と言つた。

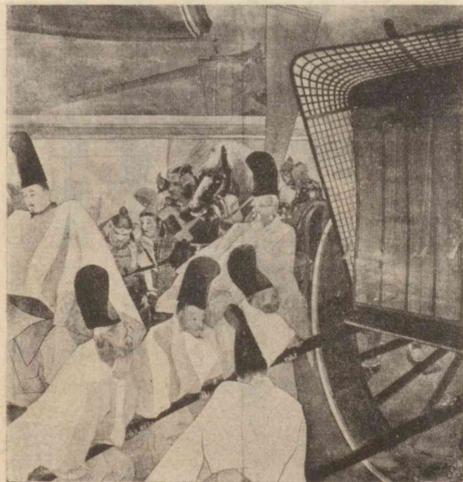
讒奏

(二)後白河法皇

き。一の宮の御事は、故刑部卿の殿の養君にてましまししかば、かたがた見放ち参らせ難かりしかども、故院の御遺誠(三)に任せて、御方にて先を駈けたりき。これ一つの奉公。次に平治元年十二月、信賴(四)、義朝が謀叛の時、院内を取り奉つて大内に立籠り、天下暗闇となつたりしにも、入道隨分身を捨てて兇徒を追落し、經宗(七)、惟方(八)を召縛めしに至るまで、君の御爲に既に命を失はんとする事たびゝに及ぶ。されば人何と申すとも、いかでこの一門をば七代までは思し召し棄てさせ給ふべき。それに成親といふ無用のいたづら者、西光(一〇)と申す下賤の不当人が申す事に君のつかせ給ひて、動もすればこの一門滅さるべき由の御結構こそ然るべからぬ。この後も讒奏する者あらば、當家追討の院宣を下されつと覺ゆるぞ。朝敵となつて後は、いかに悔ゆとも益あるまじ。暫く世を鎮めん程、法皇(二)をば鳥羽の北殿に遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせんと思

(一)平重盛の邸。

ふはいかに。その儀ならば、定めて北面の者共がうちより、矢をも一つ射んずらん。その用意せよと侍共にふるべし。大方は入道、院方の奉公思ひ切つたり。馬に鞍おかせよ。著背長取出せ」とこそ宣ひければ、主馬判官盛國急ぎ、小松殿に馳参つて、「世ははやかう候」と申しければ、大臣聞きもあへ給はず、「嗚呼、はや成親卿の首の刎ねられたんな」と宣へば、「その儀にては候はねども、入道殿の御著背長を召され候上は、侍共も皆うち立つて、只今院の御所法住寺殿へ寄せんとこそ出立ち候ひつれ。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し参らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし参らせうとは候へども、



く赴へ殿條八西盛重

(二)鳥羽、後白河  
兩法皇の離宮  
今京都市東  
山区三十三  
堂の東南間

禪門

(一)清盛の邸。

内々は鎮西の方へ流し参らせんとこそ議せられ候ひつれ」と申しければ、大臣、何によつて只今さる事のおはすべきとは思はれけれども、今朝の禪門の氣色、さる物狂ほしき事もやおはすらんとて、急ぎ車を飛ばせて、西八條殿へぞおはしたる。



(筆湖廣橋高)

門前にて車よりおり、門の内にさし入りて見給ふに、入道腹巻を著給ふ上、一門の卿相雲客數十人、各色々の直垂に思ひくゝの鎧著て、中門の廊に二行に著せられたり。その外、諸國の受領、衛府、諸司などは縁にゐこぼれ、庭にもひしと並みゐたり。旗竿など引側めく、馬の腹帯を固め、冑の緒を締め、只今皆うち立たんずる氣色どもな

さやめく

るに、小松殿、烏帽子直衣に大紋の指貫のそば取つて、さやめき入り給へば、殊の外にぞ見えられける。

入道伏目になつて、あはれ例の内府が世をへうするやうにふるまふものかな。大きに諫めばやと思はれけれども、流石子ながらも内には五戒を保つて慈悲を先とし、外には五常を亂らず、禮儀を正しうし給ふ人なれば、あの姿に腹巻を著て向はん事、流石面はゆう恥づかしうや思はれけん、障子を少し引立て、腹巻の上に素絹の衣を、あわて著に著給ひたりけるが、胸板の金物の少し外れて見えけるを隠さうと、頻りに衣の胸を引違へ〜ぞし給ひける。大臣は舍弟宗盛卿の座上に著き給ふ。入道宣ひ出さるゝ事もなく、大臣もまた申し上げらるゝ旨もなし。

面はゆし

一四 小松内府その二

一向

一向法皇

稍あつて入道宣ひけるは、あの成親卿が謀叛は、事の數にも候はず、一向法皇の御結構にて候ひけるぞや。暫く世を鎮めん程、法皇をば鳥羽の北殿へ遷し參らするか、然らずばこれへまれ御幸をなし



盛 重 平

參らせんと思ふはいかに」と宣へば、大臣聞きもあへ給はず、はらくとぞ泣かれける。入道さていかにやいかにとあきれ給へば、稍あつて大臣涙を抑へて、この仰承り候に、御運ははや末になりぬと覺え候。人の運命の傾かんとては、必ず悪事を思ひ立ち候なり。また御有様を見參らせ候に、更にうつゝとも覺えず候。流石我が朝は邊地粟散の境とは申しながら、天照大神の御子孫、國の主として、天兒屋根命の御末、朝の政を掌らせ給ひしよりこの方、太政大臣の官に至る人の、甲冑を

邊地粟散の境

破戒無慚

よろふ事禮儀を背くにあらざや。就中御出家の御身なるに、法衣を脱捨て、忽ちに甲冑をよろひ、弓箭を帶しましまさん事、内には破戒無慚の罪を招くのみならず、外には仁義禮智信の法にも背き候ひなんぞ。かたゞ、恐ある申事にて候へども、心の底に旨趣を殘すべきにも候はず。先づ世に四恩候。天地の恩、國王の恩、父母の恩、衆生の恩、これなり。その中に最も重きは朝恩なり。普天の下王地にあらざといふ事なし。さればかの潁川の水に耳を洗ひ、首陽山にわらびを折りし賢人も、救命の背き難き禮儀をば存知すところ承れ。いか況や、先祖にも未だ聞かざつし太政大臣を極めさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府、槐門の位に至る。しかのみならず、國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらざや。今これ等の莫大の御恩を思し召し忘れさせ給ひて、みだりがはしく法皇を傾け參らせ給はん事、天照大神、正

〔一〕普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。〔二〕詩經、濟縣の南にある。〔三〕伯夷、叔齊。

蓮府 槐門 一家の進止たり

八幡宮の神慮にも背かせ給ひ候ひなんぞ。それ日本は神國なり。神は非禮を受け給ふべからず。この一門が代々の朝敵を平げて、四海の逆浪を鎮めし事は無雙の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人とも申しつべし。然れども當家の運命未だ盡きざるによつて、事既に露れ候ひぬ。その上、仰せあはせらるゝ成親卿を召置かれぬる上は、たとひ君いかなる不思議を思し召し立たせ給ふとも、何の恐か候べき。所當の罪科行はれぬる上は、退いて事の由を陳じ申させ給ひて、君の御爲には愈、奉公の忠勤を盡し、民の爲には益、撫育の愛憐を致させ給はゞ、神明の加護にあづかつて、佛陀の冥慮に背くべからず。神明佛陀感應あらば、君も思し召し直す事などか候はざるべき。

奉公の忠勤を盡す 撫育の愛憐を致す 佛陀の冥慮

これは尤も君の御ことわりにて候へば、かなはざらんまでも、院中を守護し參らせ候べし。その故は、重盛初め敍爵より今大臣の大

一入再入

將に至るまで、しかしながら君の御恩ならずと言ふ事なし。その恩の重き事を思へば、千顆、萬顆の玉にも超え、その恩の深き色を案ずれば、一入、再入の紅にもなほ過ぎたらん。然らば院中に参り籠り候べし。その儀にて候はゞ、重盛が身に代り命に代らんと契りたる侍ども少々候らん。これ等を召具して、院の御所法住寺殿を守護し参らせ候はゞ、流石以ての外の御大事にてこそ候はんずらめ。悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の巔よりもなほ高き父の恩忽ちに忘れんとす。傷ましきかな、不孝の罪を逃れんとすれば、君の御爲には既に不忠の逆臣ともなりぬべし。進退これ谷れり。是非いかにも辨へ難し。申し受くる所詮は、唯重盛が首を召され候へ。その故は、院参の御供をも仕るべからず、また院中をも守護し参らすべからず。富貴といひ、榮華といひ、朝恩と申し、重職といひ、かたゞ極めさせ給ひぬれば、御運の盡きん事難かるべきに

あらず。富貴の家には祿位重疊せり。二たび實なる木は、その根必ずいたむと見えて候。心細くこそ候へ。いつまでか命生きて亂れん世をも見候べき。唯末代に生を受けて、かゝる憂目に逢ひ候。重盛が果報の程こそ拙う候へ。只今も侍一人に仰せ附けられ、御つぼの中に引出されて、重盛が頭を刎ねられんずる事は、いと易い程の御事。こそ候はんずらめ。これを各聞き給へ」とて、直衣の袖も絞るばかりにかき口説き、さめんと泣き給へば、その座に並みる給へる平家一門の人々、皆袖をぞぬらされける。

入道、頼みきつたる内府は、かやうに宣へば、世にも力なげにて、いやいや、それまでの事は思ひも寄り候はず。悪黨どもの申す事に君のつかせ給ひて、いかなる癖事などもや出て來んずらんと思ふばかりでこそ候へ。天臣たとひいかなる癖事出て來候へばとて、君をば何とかし参らせ給ふべき」とて、つい立つて中門に出て、侍どもに



(一)源義經。

る源九郎<sup>(一)</sup>早くも四國へ渡り來て、平家はまた海に浮びぬ。阿波、讃岐既に背きて、敵の勢は漸う加れり。長汀の煙波<sup>(二)</sup>もとの如くうるはしけれども、悉く敵地なれば、漕寄すべき渚もなし。あはれ平家、かゝる時にすら風雅の遊は忘れざりき。日暮小舟を渚に漕寄せて、高く紅の扇を艦にさし立て、かの五衣に緋の袴著たる女房の、こを射よとぞ源氏の武者を誘ふめる。那須の與一が譽の弓勢に、兩軍聲を揚げて相和せしが、餘りの面白さに感に堪へずやありけん。平家の侍の、かの扇立てたる所にて舞ひすましけるをば、無慚や與一は眞倒様に射仆しけり。東えびすには、人を殺す外に譽といふもののなかりしぞ是非もなき。

二

平家は流石に名門なりければ、没落の際まで大義名分を執りて動かざりき。

(一)源義仲  
(二)源頼朝  
勝算

頽勢を廻らす

木曾<sup>(一)</sup>は兵衛佐に疎まれて、東國の討手はや途にあり。是に於て強ひて院宣を請ひうけけれども、孤軍もとより勝算なし。乃ち使を西國に立て、合體して兵衛佐を討つべき由を言送りぬ。平家の答はかくなりき。よしや平家一門の世は季になりぬとも、木曾などに語らはれて、いかでか都へ上るべき。畏くも十善の帝王、三種の神器を帶してこなたにわたらせ給ふ。須く冑を脱ぎ弦を外し、來りて軍門に降るべし。さらば東國征討の御供にも加へらるべきか。と。あゝ、何ぞその言辭の堂々として、亡落の輩にふさはざるや。平家人に乏しかりけれども、一時の權變を弄びて頽勢を廻らさんとだに思はゞ、かゝる時こそ乗ずべき機會なれ。さるを、名分の正しきを執りて成敗の數を顧ず。若し偏に利害の眼よりすれば、迂は即ち迂なるべけれど、かくて亡びんは、恥を含みて存へんよりも、いかばかりうるはしかるべき。

(一)今福岡縣(筑前國)筑紫郡太宰府町。  
(二)緒方維義。  
(三)後白河法皇。  
(四)平時忠。清盛の妻時子の兄。

(四)平重衡。清盛の子。一の谷の戦に捕へられ、鎌倉に送られ、後木津川で斬られた。年二十九。  
(六)平通盛。教盛の子。一の谷の戦に死んだ。  
宥恕

その太宰府へ落行くや、緒方(一)の三郎使して申しけるは、「誠に重代の芳恩を思はざるにあらざれども、一院(二)の仰默し難ければ、九國に置き奉るべき地も候はず」と。平大納言乃ち衣冠束帯して出向ひて宣ひけるは、「それ我が君は天神四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。祖宗、歴代の神靈、我が君をこそ守らせ給ふらめ。就中當家は保元平治以來、たびく(三)の逆亂を鎮めて、九州の者どもをば皆内様へこそ召されしか。然るを何ぞや、かゝる重恩をもうち忘れて、東えびすの下知に従ふこそ奇怪至極なれ」と。

本三位の中將一の谷に捕はれけるに、院宣屋島に下りて、三種の神器を都へ上さば、重衡を放ち還さんとぞ傳へける。この時の平家の請文(四)こそ誠に壯大ならびなかりしか。曰く、「院宣謹みて承り畢んぬ。通盛の卿以下、一の谷にて討たれける者その數少からず。何ぞ重衡一人の宥恕(五)を喜ばんや。三種の神器は正統の天子一日も御身を

(一)第八十代。

東夷北狄の禍天に二日なく國に二君なし

妄りに干戈を弄ぶ

(二)その場所は詳かでない。或は薩南諸島の總名と云ふ。今奄美大島の東方にあるが別である。喜界ケ島がある。支那の異稱。

はなし給ふべきにあらず。抑、我が君は故高倉の院の讓を受けさせ給ひてより、茲に四年、東夷、北狄の禍にあひて、暫く西國へ行幸あるのみ。天に二日なく、國に二君なし。還幸なからんに於ては、神器などか都へ還るべき。抑、頼朝は逆賊の裔、幸に入道相國の慈悲によりて申し宥められしところなり。然るに忽ちにしてこの鴻恩を忘れて、妄りに干戈を弄ぶ。神罰やがてその身に返るべきか。君にも當家累代の奉公、亡父數度の忠節を思し召し忘れずば、逆賊の裔に與し給はずして、早く西國の御幸あるべきか。一門の武運、茲に盡きなば、鬼界、高麗、天竺、震旦の果までも罷りなん。悲しいかな、人皇八十一代が間、傳承あやまりなかりし靈器、今にして空しく異國の寶とならんとは、宗盛頓首謹みて申す」と。

かくて平家は亡びぬ。亡ぶるまでも成敗の爲にその名節を枉ぐる事をなさざりき。あはれ、平家の世ざかりは誠に大いなりしが、そ

の没落の更に大いなるには及ばざりき。うるはしきかな平家。かくして亡びたりとて、何の恨むるところぞ。  
——樗牛全集——

一六 みとり日記

小林一茶

享和元年四月二十三日 晴

いかなればかゝるあさましき所にうつぶし給ふらんと抱き起し侍るに、蓬が下の土となり給ふ前表なりと、後に思ひ知りたり。いかなる悪日にかありけん、些か心地惱ましうとなんありけるに、急に發熱さかんにして、膚は火にさはるが如くなれば、飯を勸むれども一箸も咽に通らず。こはいかにと、獨り驚き魂を消すと雖もせんすべなく、たゞ揉みさするより外はなかりけり。

四月二十五日 曇 晴

病日にくゝ重りて、けさは重湯も通らず、たゞ頼みとするは、薬の

(一)江戸時代の俳人。名は彌太郎。信濃の人。文政十年(一八二九年)六十五歳。二(二)四六一年。蓬が下の土となる

一しづくづゝ納るのみなり。終日もだえ苦しみ給ふ。傍に附添ふ事の悲しびは、自ら脳むより思ひまさりて苦しかりき。

五月三日 晴

迅積は己がさじにては薬も得届かざる旨告げたりけるに、今まで神佛とも頼みし醫師にかく見放さるゝ上は、祕法、佛力を借り、諸天應護の憐れみを請はんと思へども、宗法なりとて許さざれば、ただ手を空しうして最期を待つより外はなかりけり。さてしも果てぬ事なれば、善光寺の醫師道有を招かまほしく、とみに人を走らせけり。今に玉の緒の餘りも、このたびは元の人になり給へと、醫師の來るをのみ待ちゐたりけるに、日入果て、門々に灯點す頃、やゝ駕籠の見えければ、とく病人を見せしむるに、迅積が言へる如く、萬づに一つもこの世の人とは見えずとなん言はるゝ。今は頼むべき綱も切れて、たゞ湯水の咽に通ふを力に、夜の明くるを待ちたりけり。

(一)一茶の郷里柏原より程近き野原の醫。諸天應護の憐れみを請はん

(二)長野市大峯山麓にある。天台、浄土、兩宗。玉の緒

たうぶ

(一)今の長野縣上水内郡古間村。原村の南方。

異例

四日 昨日にうちかはりて顔色うるはしく、何ぞたうべたきなど言はるゝに、嬉しさ限りなく、よべの薬の驗に親の蘇りたる心地して、かたくりなど練りて參らせけるに、椀に三つ四つすゝりこみ給ふ。道有も、この趣にて變の來らざれば、程なく快氣なるべしとなん言はるゝに、枕に附添ふ己もやゝ安堵の思をなしぬ。道有老歸り給ふに、古間(一)の里まで見送り侍り。雨雲も西へ東へかたづきて、空の様こよなう珍しく、時鳥の初音をり得顔に告渡る。この鳥とくも啼きつらんに、父の異例の日より、日は日すがら、夜は夜すがら心を空にして仕へまつれば、魂狂ふ事のみにして、聞きつるは今日始めての心地なりき。

七日 晴 時鳥われも氣あひのよき日なり

(一)一茶の異母弟。

(二)今の上水内郡柏原村。

毒斷

仙六(一)は藥を請ひに善光寺へ行く。夏の日(二)のつれづれにおはしければ、何ぞたうべたきと問ひ參らせたれども、穀のたぐひしかく、と好み給はねば、梨一つ參らせた(三)く思へども、みず々刈る信濃の不自由なる我が里は、青葉がくれに雪の白々残るばかり、野もせ、山もせ、夏なほ寒き風の吹くのみなりき。梅賣る人の聲の門に聞ゆれば、青梅たうべたしとむづかり給へど、毒なりと參らせず。あはれ、いつの日か毒斷のなき人にして見まほしく心は騒げども、うつらと首重たげに見え給ふぞ、あぢきなき有様なる。

十日 晴

頻りにありのみたうべたしとむづかり給へば、このあたりのゆかりあるもなきも、親しき限り富みたる家、心あたりある門、聞きつくし尋ね搜しつくすと雖も、ありのみ一つ貯へたる人とはなく、

時めく  
(一)今の水上内郡  
 中郷村の字八  
 柏原の南約ル  
 キロメートル  
(二)茶と悪母と  
 の中が父はつ  
 家におく父は  
 たにおく父は  
 はと一歳の時  
 十は歳の時江  
 戸へ奉公に出  
 した。

夏さへ寂しき山國なりき。今日は藥の絶間なれば、善光寺へ行かまほしく、曉にしたくして門を出でけるに、五月の空もほの／＼晴れて、白雪ははた山にあるからに、青葉がくれの花は春を残して、種蒔の山人など懐かしく、時鳥の三聲一聲もこよなく時めく空なるに、何となく心晴れぬ曙なりけり。卯の下刻<sup>(一)</sup>牟禮<sup>(二)</sup>てふ驛に至るに、こはそのかみ一茶江戸へ赴ける日、父の翁見送り給ひし里なりけるが、今は二十四年の昔となりき。川の音、坂の形もほのかに心おぼえありて、何となく嬉しけれど、人は知らぬ顔のみとなりけり。辰の刻ばかりに善光寺に著く。

抑この地は御佛の淨土にしあれば、肆の軒を争ひ、幌は風に飜り、入る人出づる人、國々より遙々あゆみを運びて、未來の成佛を希はぬ人なかりき。己は今日父の命を受けて、御藥使はた梨を搜しに來つるなれば、天をかけり地をくゞりてなりとも梨一つ得まほしく、

(一)二十の四孝の  
 人管孟宗の  
 故事嚴冬に  
 母を請はた  
 孟宗は竹を  
 入つては泣  
 した。  
(二)十の四孝の  
 人管孟宗の  
 故事嚴冬に  
 母を請はた  
 孟宗は竹を  
 入つては泣  
 した。  
(三)今長野市吉  
 田の

ある程の乾物店、ある程の青物店を、足を空にして駈巡るに、悲しさはさらに片われ一つありとさへ言ふ人はなかりき。昔雪中に筍を掘り、氷上に魚を求めしためしもあるに、我梨一つ得る能はざるは、皇天我を捨て給ふかや、佛神我を見限り給ふかや、一世ばかりの不孝にはあらじ。父はさぞ梨を待ちぬ給ふらん。このまゝに歸りて、父を何と慰めんと思へば、胸せき塞がりて、忍び落つる涙は大道を潤し、往き來の人の狂者と笑はんも恥づかしく、暫く手を組み首をうなだれて、心を静めけり。この地になき物いづちにかあらん。唯一足も早く戻りて、藥ばし進め奉らんと、手を空しうして吉田<sup>(三)</sup>てふ里に來れるに、木立の山鴉三つ四つ我を見ては聲をたつるに、何となく父の身の上の心にかゝり、息もつぎあへず足をはやめし程に、日影八つ時といふ頃宿に戻る。父はいつより顔色うるはしく、笑を含み給ふに、梨を得ざりし事を語らばまたや氣色を失はんとやせん

(一)今の新潟縣高田市。柏原五ノ五キロメートル根なしごと

(二)内藤林右衛門の藩士。後山門に入り、後山門に學び、門佛に入つた。寶永元年(一七三四年)寂。年四十二。大島陽喬。佛人。江戸の人。天明七年(一八二七年)歿。年七十。上島治房。佛人。攝津の人。元文三年(一八〇三年)歿。年三十八。炭氏。佛人。江戸の人。明和十一年(一七九三年)歿。年六十三。

かくやせんとためらふに、父の聞き給へばありのまゝを答へ、高田へ参りて尋ね來り参らすべしと、白雲のよすがも知らぬ根なしごと申して、父をなだめ奉りしは、本意なき夕べなりけらし。

一七 ほとゝぎす

目には青葉やまほとゝぎす初がつを  
鞘ばしる友切丸やほとゝぎす  
杜鵑なくや湖水のさゝにこり  
一聲の江に横たふやほとゝぎす  
蘭田刈つて水雞に遠き寢覺かな  
行水の捨てどころなし蟲の聲  
石工のみ冷したる清水かな  
橋おちて人岸にあり夏の月

素堂 蕪村 丈草 芭蕉 蓼太 鬼貫 蕪村 太祇

(一)佛人。加賀金澤の人。京都で醫を業とし、門人。芭蕉年不詳。

(二)禍之與福(何異利害) (史記賈誼傳) 塞翁が馬 (三)禍兮福之所倚、福兮禍之所伏。孰知其極。(老子) (四)下總國(茨城縣)古河

夕立や家をめぐりてあひる鳴く  
順禮のよる木のもとやところてん  
涼しさや朝草門になひこむ

一八 芳流閣上の血戦

瀧澤馬琴

古への人言はずや、禍福はあざなへる繩の如し。人間萬事往くとして塞翁が馬ならぬはなし。それは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり。とは思へども豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言、記念の名刀、心に占めつ、身につけつ、艱苦のうち、年を経て、得難き時を得てしかば、遙々滯我へもたらして、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍と、ふりかはりたる村雨の刃はもとの物ならで、我が身を劈く譬とぞなりし、憾を茲に釋く由もなく、事急にして意外にあり。僅かに當座の辱を避けばや

と思ふばかりに、あまたの圍を切開きて、芳流閣の屋の上に、攀登れどもとにかくに、脱れ去るべき途のなければ、其所に必死をきはめたる、心のうちはいかなりけん、思ひ遣るだにいと傷まし。

からめる(擲)  
なまじひ(愁)



龍 澤 馬 琴

閣は三層なり。その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪難き、頃は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、ほてりを渡る敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には

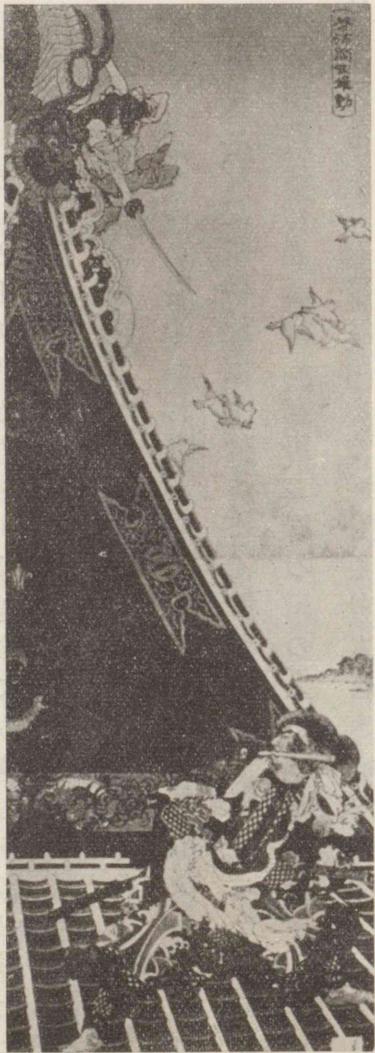
身を霞ませて  
登る

(一)利根川の異稱

鼠(一)むさゝび(麴)

かたみ(送)  
浮圖  
(二)足利持氏の子  
鎌倉の管領  
(三)管領足利氏の  
執権職

大河滔々たる、此所生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷りし、敵にしあればいかで我、繋ぎ留めんとむさゝびの、樹傳ふ如くさらくと、登り果てたる三層の、屋根



芳流閣上の血戦 (月岡芳年筆)

にはまぶしさす由もなく、かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なるこふの巢を、巨蛇の狙ふに似たりけり。廣庭には成氏朝臣横堀史在村等の、老黨若黨圍繞せし、床几に腰

(一)支那周代の哲學者。名は翟。姓は公輸、名は般。魯の人。巧に機械を作つた。

(二)第九代欽明天皇の朝百濟に使し、雪夜はれたの虎を食はれたのを憤り、虎穴をさがつて虎を獲た人。  
(三)和田義盛の臣。將軍源實朝の前で二箇の大鹿角を重ねて折つた。  
さもあらばあれ(遮莫)

をうち掛けて、勝負いかにと見上げたり。また閣の東西には、腹巻したる許多の士卒、槍、長刀をきらめかし、或は矢を負ひ、弓杖突立て、組んで落ちなば撃留めんとて、項を反してこれを觀る。しかのみならず外面は、連綿として杳かなる、河水遶りてみぎりを浸せば、たとひ信乃武事長け、膂力衰へず、よく見八に勝ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず。魯般が雲の梯なれば、地上に下るべくもあらず。かれ鳥ならずも羅に入りぬ、獸ならずも狩場にあり。三寸息絶ゆれば、事皆やまん。脱れ果てじと見えたりけり。

その時信乃思ふやう、初層、二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、斬落しつる後は、絶えて近附く者もなきに、今唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。しやつはこれ膳臣巴提便が、虎を暴にせる勇あるか、また富田の三郎が、鹿の角を裂ける力あるか。さもあらばあれ一人の敵なり。引組んで刺違へ、死するに難き事やはある。

擬議

一上一下

虚々實々

見る目遙か

よき敵にこそござんなれ。目に物見せんと血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高瀬の如きはこ棟に、立つたるまゝに寄するを待てば、見八もまた思ふやう、かの犬塚が武藝勇悍、素より萬夫無當の敵なり。さりともからめかねて、他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出されしかひもなし。からめ捕るとも撃たるとも、勝負を一時に決せんものを、と思ひにければ、ちつとも擬議せず、「御諍さふ」と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くにはこ棟の、左の方より進み登りて、組まんとすれども寄せつけず、「心得たり」と、鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へばすかさずこむ刀尖を、支へて流す一上一下、滑る薨を踏止めて、頻りに進む捕手の秘術、彼方も劣らぬ手練の働、嵩より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負をわかざれば、廣庭なる主従士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見る目もいと遙かなり。

錚然

ていたらしく

つば(鏢)  
ねちる(振)

さる程に犬塚信乃は、侮り難き見八が、武藝に敵を得たりけりと、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、寄せては返す太刀音、掛聲。兩虎深山に挑む時、錚然として風發り、二龍青潭に闘ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕べの虹か、と見るばかりなる、いと高き閣の棟にして、死を争ひして、いたらく、世に未曾有の晴業なれば、見八は著籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまで、に切裂かれしかど、太刀を抜かず。信乃は刀の刃も續か、で、初に淺痕を負ひしより、次第に痛みを覺ゆれども、足場を計りて、撓まず、去らず、疊みかけて、撃つ太刀を見八右手に受流して、返す拳に附入りつゝ、やつとかけたる聲と共に、眉間を望みてはたと打つ、十手をちようと受留むる、信乃が刃はつば際より、折れて遙かに飛失せつ。見八得たりとむんずと組むを、そがまゝ左手に引著けて、かたみに利腕しかと取り、ねち倒さんと曳聲合せて、揉みつ揉まるゝ

覆車

力足、これかれ齊しく、蹈滑らして、河邊の方へころ／＼と、身をまろばせし覆車の俵、坂より落すに異ならず。勾配險しきかけづくりに、削り成したるいらかの勢、止るべくもあらざめれど、かたみに取つたる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙かなる河水の底には、入らで程もよし、水際に繋げる小舟の中へ、うち累りつゝ、どうと落つれば、傾く舷と立つ浪に、ざんぶと音する水煙、纏ちようと張切つて、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、さそふ水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

—南總里見八犬傳—

一九 日本精神の復興

池岡直孝

明治維新以來七十年間に於ける日本の急速な興隆は、西洋文化の模倣による事が多大であつた。その結果は、一面に於て利すると

(一)倫理學者。明治大學教授。明治二十年(二五四七年)鳥取縣に生れた。

ころがあつたと同時に、他面には失ふところもあつた。その利せる方面とは、主として物質文化の方面である。西洋の自然科学を應用した衣食住、交通、通信、醫術、衛生、農業、工業、軍事等の現在の物質的文化は、これを明治維新前のそれと比較するならば、實に隔世の感がある。この方面に於て、我が國は西洋文化に負ふところが甚大である。と謂はなければならぬ。しかしながら、飜つてその失ふところを見るに、西洋精神文化の模倣心酔によつて、我が國在來の精神文化は捨て、顧られる事なく、大和心、日本精神は影を潜め、茲に日本人にして西洋心を有する變態的日本人をさへ生ずるやうになつた。かくて危険思想にかぶれる輩が相次いで現れ、思想國難に直面するに至つたのである。これ最も憂ふべき現象である。かくて日本精神復興の氣運が起つて來た。加ふるに滿洲國獨立を契機として、國際聯盟の脱退となり、愈々日本精神復興は促進されるやうになつた。

西洋心を有する變態的日本人  
思想國難

今や我が國は内外未曾有の國難に際會し、獨力を以てこれを打開しなければならぬ實狀にある。而してその根本原動力となるものは、大和心、日本精神を措いて他にない。實に現下の非常時日本を救ふものは、大和心、日本精神である。日本精神の復興こそは、急務中の急務と言はなければならぬ。

つらく、精神文化に關する學問思想の方面に就いて過去七十年の歴史を通觀するに、傳統的な日本の學問思想は價值なきものとして顧られる事なく、徒に西洋の學問思想を模倣する事に努めた。茲に日本人としての精神文化研究の態度の上に大なる錯誤があつたのである。されば吾人は先づ以て、學問思想研究の態度の上に、一大反省を加へねばならぬ。

私は遡つて、江戸時代の支那心醉状態と、現在の西洋心醉状態とを比較して陳べる事が、甚だ興味ある事と思ふ。

(十四卷。本居宣長の隨筆)

江戸時代の支那心醉に對して、大和心、日本精神の復興を絶叫した者は國學者たちであつた。そこで彼等の主張と態度とを回顧してみたい。本居宣長は漢學を専らとする儒者を非難して、玉勝(一)間の中に次のやうに陳べてをる。

儒者に皇國の事を問ふに、知らずと言ひて恥とせず。から國の事を問ふに、知らずと言ふをばいたく恥と思ひて、知らぬ事をも知りがほに言ひまぎらす。こは萬づをからめかさんとする餘りに、その身をもから人めかして、皇國をばよその國の如くもてなさんとするなるべし。されど、なほから人にはあらず、御國人なるに、儒者とあらん者のおのが國の事知らであるべきわざかは。たゞし、皇國の人に對ひてはさあらんも、から人めきてよかんめれど、若しから國人の間ひたらんには、われはそなたの國の事はよく知れども、我が國の事は知らず」とは、流石にえ言ひたらじをや。若

え言ひたらじをや

しさも言ひたらんには、「おのが國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか人の國の事をば知るべき」とて、手をうちていたく笑ひつべし。

今の西洋の學問思想に心醉せる輩は、西洋の事のみ知つて、日本の事は知らないのである。宣長の言は直ちに、これを現代の西洋心醉者に適用する事が出来る。またこれと同様の趣旨の事を、同書の別の所に次のやうに述べてをる。

すべて何事もおのが國の事にこそ従ふべけれ。そを捨て、他の國の事に従ふべきにはあらざるを、かへりて他の國の事に従ふを賢きわざとして、皇國の事に従ふはつたなきわざと心得ためるは、皇國の學者のあしき癖なり云々。

實に現時の學者に取つても、意義の深い教訓でなければならぬ。しかし、宣長の時代の學問に比し、今日の學問は餘程種類が多くな

國境のない學問  
國境のある學問

人文

金科玉條

つて來たから、宣長の言は勿論訂正して考へねばならぬ。

今日一口に學問と言つても、種類が甚だ多いが、これを二大別する事が出来る。一つは國境のない學問で、他の一つは國境のある學問である。前者は數學や自然科学のやうなもので、何國の人が研究しても、同一の結果に達するものであるから、國によつて相違のあるべきはずはない。しかし、哲學、倫理、政治、法律、經濟、軍事、教育といふやうな人文的な學問になると、國によつて異なるべきである。かゝる學問は國境のある性質のものである。然るに、唯西洋人の研究を金科玉條とし、これを鵜呑にし、それによつて日本の哲學、倫理、政治、法律、經濟を解釋しようとする。かくして日本の文化は曲解され、誤解される。かやうな事で眞の日本がわかり、その健實な發達を促し得るはずがない。今や行詰つた政治、經濟、それにからまる社會問題、思想問題の解決をなすに當つて、單なる西洋の翻譯的學問思想そ

340万人  
=3万条

自己沒却  
沐猴にして冠す

のままを適用して、それで濟む譯にはゆかない。必ずや我が國の問題は我が國の特有な解釋と解決とによらねばならぬ。

それには、何よりも先づ日本を知る事が肝要である。即ち、日本の國性、傳統、文化、一言にして言へば、日本精神を知る事が根本的に必要である。これが研究は日本の學問或は日本學であり、これを知る事が日本學者の任務である。日本人にしてこの日本の學問をせず、日本を知らずして、どうして外國の文化の眞價がわからう。我を知らずして彼を知る事は不可能である。我を知らずして徒に彼を學ぶのは、自己沒却であり、盲拜盲從であり、西洋人から見れば、いはゆる沐猴にして冠するものとの嘲笑に値する外の何物でもないであらう。

かやうの事を言へば、或人は非難して、それは偏狹固陋の思想であつて、現代の時勢に逆らふものだと言ふかも知れない。勿論余輩

これに目を蔽ふ

とても、徒に西洋の學問思想を排斥し、これに目を蔽ふべしと言ふのではない。先にも述べたやうに、國境のない性質の學問に就いては、進歩した西洋のものを輸入するのは何等差支ない事であるばかりでなく、今後も盛に輸入するを可なりとする。さりながら、國境のある學問思想に就いては、これと大いに異なるものがある。凡そ西洋の學問思想は、西洋の特殊な事情に條件づけられて生れたものであるから、直ちにこれを我が國のものとするのは誤つてゐる。我が國には當然我が國独自の學問思想があるのである。然らば、一體何の爲に西洋の學問思想を研究するかと言ふに、善きを取り、惡しきを捨てて、これを皇國に用ひんが爲に外ならぬ。國境のない學問の場合でも、この主意を忘れてはならぬが、殊に國境のある學問思想の研究に就いては然りである。されば、西洋の學問思想を研究するのは、今後も大いに努めなければならぬが、皇國の事を忘れて、

彼を以て我を律す

(一)江戸時代の國學者。秋田の國人。天保十四年(一八四三年)歿。年六十。

(二)二卷、神道に關する講話を筆録したもの。

動もすればひたすらに西洋に心酔する結果は、彼我の相違を忘れ、彼を以て我を律せんとするに至る。茲に主客顛倒の結果を生じ、不測の禍をおのづから醸し來るのである。されば、外國の學問思想の研究には、先づ皇國本位の立場からこれを批判し、同化し、善用すべきであつて、徒な心酔模倣は絶対に止めねばならぬ。日本の學者は飽くまでも皇國第一を心掛けねばならぬ。私は此所で國學者平田篤胤の言を借用したい。彼の伊吹於呂志といふ書の中に、「儒生」の事を論じた冒頭に次のやうな一節がある。

今の世の儒生輩の學風も、大方は孔子の意に反く事、實に歎息の至りて御座る。それは、本として學ぶべき皇國の學びをせず、漢籍のみを學んでをるが、學問は何の爲にする事と心得たるか。すべて學問の道は、たとひ外國の事を學ぶに致せ、その學ぶ主意は、その善事を取つてこの御國の御用にせんとて學ぶことぢやに

(一)周の武王の弟  
周公旦の封ぜ  
られた國。今  
の山東省滋陽  
縣地方。

有意義な教訓

よつて、先づ御國の事を本とし學んで、さて外國の學びに及ぶが  
順道で御座る。かの卑しき口ずさびにも、「虎の鳴く聲を聞かれて  
儒者困り、また魯の國のせんぎする間に腰かゞみ」と申したは、儒  
者のこの癖を詰つたもので御座る云々。  
右の一節は、現代の西洋心醉に陥つた學者に取つて、有意義な教  
訓であると思ふ。私は魯の國のせんぎする間に腰かゞみを、現代的  
に「西洋の研究する間に腰かゞみ」と作りかへてみたい。皇國に生れ  
ながら皇國の事は研究せず、西洋の事ばかり詮索して、御國の用に  
もたゞず老いてしまふ。これでは、皇國の學者としての眞の使命は、  
果されたものではない。勿論、西洋の學問思想を研究するのを非難  
するのではない。その研究を皇國第一、皇國本位の立場から爲し、こ  
れを善用して、皇國の學、日本學に資せしめる事を忘れるのを、非難  
せざるを得ないのである。

他山の石

國境ある學問思想の研究を爲すに當つては、我が皇國日本を根  
基として研究すべきである。この心構を以てするならば、萬卷の洋  
書を讀んでも決して迷ふ事はない。否その反對に、善きにつけ悪し  
きにつけ、皆他山の石として、皇國の學問思想の發展に資せしめ得  
るのである。

**國粹文**

日本精神と日本武道

(一) 互理章三郎

賀茂眞淵は日本魂を解釋して、「高く直き大和魂」と言ひ、「その高  
き中にみやびあり、直き中に雄々しき心はあるなり」と述べてあ  
る。平田篤胤は武勇である事を我が日本魂の一特性とし、「御國人  
はおのづからに武く、正しく、直に生れつく。これを大和心とも御  
國魂ともいふで御座る」と言つてゐる。「武士のやまと心は折れじ  
曲らじ」「武士のやまと心をとぎて佩く」などと言つて、武士といふ

(一)倫理學者。東  
京高等師範學  
校教授。明治  
六年(一八七  
三年)兵庫縣  
に生れた。

みやび  
風雅。

とぎて佩く  
磨いで心に保  
ち持つ。

山岡部

山岡部

語が大和心の枕詞として用ひられるやうになつてゐる。この日本魂が即ち日本精神であつて、武といふ事が日本精神の一特質を成して居り、その武なる日本精神の道として發現したものが、即ち日本武道である。故に日本精神と日本武道とは、根本的に一體の關係を固有してゐるものであつて、日本精神を離れて日本武道を理解する事も出来なければ、日本武道を外にして日本精神を體得する事も出来難いものとなつてゐる。私は此所に聊か兩者の關係を述べてみたいと思ふ。

日本精神は全體としていかなるものであるかと言ふと、我が國を皇國としてこれを永遠に興隆せしめて行くところの精神である。本來、國家的な事が我が日本精神の特質であつて、これを西洋の個人本位の氣習や、漢土の家族本位の思想に比べると、著しい差違がある。蓋しこの特質を有する精神は、我が國が悠久の昔から皇國として肇造された事に由來し、また曾て革命の行は

氣習  
氣風習慣。

肇造  
はじめつくる  
こと。創造。

障碍  
さまたげ。

要約すれば  
ついでれば。

れた事もなければ、他の征服を受けた事もなく、儼として自主獨立の歴史を作り來つた爲に益、深厚に涵養され、この精神とこの歴史とが相俟つて、我が國運を將來に無窮ならしめつゝあるものと思はれる。故に我が日本精神は、皇國を無窮に隆昌ならしめる事を以て根本の要義とし、他のいかなるものにも、この國體の尊嚴、國運の發展に障碍を及さしめる事を許さない。一朝この國家國體に危険を感じずるやうな事があれば、日本精神は全力を揮つてその障碍に抵抗し、その危険を排除しなければ已まない。それが即ち我が日本精神の具へてゐる武徳である。更にこれを要約すれば、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの精神力が、即ち我が日本の武徳であつて、この武徳を實地に施し行ふところの道が、即ち我が日本の武道なのである。

それで我が日本の武徳武道は、決して個人としてその猛威を振はうとするものでもなければ、民族としてその征服慾を逞し

殺を好む  
殺伐な事を好む

中外  
國內と國外。  
無疆  
限りがないこと。

平和を目的とし云々  
平和を最後の目的としこれを第一の價値あるものとし、武勇は平和に到達する爲の第二義的な價値をもつてゐるものであるとするのではない。

象徴する  
説明を用ひず  
唯形にあらはして、その意義を感知させる。

くしようとするものでもない。血に飢ゑ肉に饑ゑ、残忍強暴で殺を好むが如きは、我が日本精神の最も嫌ふところである。我が日本の武徳武道を他の一面から見れば、中外の平和を致し、我が皇國の隆運を無疆に開かうとする精神その物である。我が國では平和を愛する精神も、尙武の精神も、その實一つのものである。平和の爲の武勇として、平和を目的とし、第一次的の價値あるものとし、武勇を手段とし、第二次的の價値あるものとするのではない。尙武の精神その物が直ちに平和を愛する精神なのである。尙武の精神の強さは、あらゆる障碍を排し、健全な平和を實現しようとする精神の強さを示すものであつて、尙武の精神が強ければ強い程、益、平和が高度に創造されるのである。故に我が國では、武徳武道は神聖なものであるとされてゐて、この武徳武道を象徴するものとして、武器もまた神聖視されてゐる。長くも三種の神器の中には草薙の靈劍がある。また神社に神劍があり、家々に

ちはやぶる  
神の枕詞。

歳徳  
歳徳神のある  
方向。歳徳神は陰陽家で祭る神で、この神のある方が即ち明の方である。

沐浴齋戒  
ゆあみして身をきよめ、心を清らかにし、つしみを守つてゐること。

は傳來の寶刀がある。古への武士は、毎年正月に太刀の拔初はきりといふ事を行つたが、先づ敵のある方か、または門外へ向つて、

ちはやぶる神の教を學びつゝ、  
悪魔をはらふものゝふの太刀

といふ歌を三たび唱へて、その太刀を拔放ち、それを鞘に收める時、歳徳ととの方へ向つて武運長久、國土安穩と唱へて、祈念をこめたものである。これは決して新年早々に殺伐な行を演ずるのではない。其所には武士の護國の精神と、颯爽たる意氣とが見られるばかりで、少しも血腥い、いやな感じを存しない。すべて刀劍は邪氣を鎮壓し、太平を致す爲の物とされてゐる。刀を鍛へるにも、切味のよい物をと、殺氣を含んですると必ず疵物が出来、沐浴齋戒して天下太平、國土安穩の祈念をこめてこそ、始めて圓滿な名刀が出来ると言傳へられてゐる程である。兵は凶器なりなどいふ事は漢思想である。元來物としての武器には吉も凶もないが、こ

活人劍  
人道の爲に害  
惡を去る劍

荒ぶる神等  
此所では熊野  
にあつて威力  
を振ふ神たち  
ことむけやは  
し  
歸順させ。  
(一)奈良縣高市郡  
畝傍町。  
(二)支那の周代に  
出來た易の道  
で、今日世に  
傳はる易道に

れを使用する者の精神を象徴する物として、吉とも凶とも見られる。劍を殺人劍とせずして活人劍とする我が國に於ては、兵は靈器なりである。

我が國第一代の天皇を神武天皇と申し上げるが、古事記に天皇の御創業を賛し奉つて、

荒ぶる神等をことむけやはし、伏はぬ人等をはらひ平げて、<sup>(一)</sup>火の白檮原宮にましまして天下知ろしめしき。

と言つてある。これ實に我が國の皇道であり、武徳であり、武道であつて、周易の「神武にして殺さず」の語の如きも、まだ我が國の神武の意義を盡すに足らない。

この皇道を仰ぎ、國民のそれ／＼の立場に於て義勇公に奉ずるのが、我等の武道である。故に我が國の武道は、奉公の精神を以て第一義とする。後世武士を奉公人と言ひ、その稱が更に下級にまで及んだのも、やはりこの精神を傳へてゐるのである。かの群

各自の領主を  
云々

主に對しては  
領主の對しては  
奉公する對  
して奉公する  
關係にあつた  
のではない。

末造  
末期。  
西力の東漸  
次第に東洋諸  
國に及んで來  
ること。

本具  
根本に具つて  
ゐること。

雄割據となり、次いで封建の制度を成すに至つた時代には、武士の奉公といふのも、各自の領主を對象としたもので、國家的の意義はなかつたやうであるけれども、その究極するところは、やはり皇國の公に奉ずる事であつた。さればこそ織田、豊臣の二雄の勤王によつて、天下は漸く統一の緒に就いたのである。江戸時代の末造、西力の東漸により、我が國家の獨立が憂慮されるやうになると、

しきしまのやまと心を人間はゞ  
蒙古のつかひ斬りし時宗

と慷慨して、日本精神が大いに作興され、やがて幕府は政權を返上して明治維新となり、諸藩は版籍を奉還して國家の統一と獨立とが完全になり、國運の大發展を致すやうになつたのは、奉公を第一義と心掛けた諸藩の武士に、皇國の公に奉ずるといふ日本精神が遍く本具してゐて、それが國難に激發して大活躍をし

國難に殉ずる  
國難の前に命  
を投出す。

英魂雄魂  
七生滅賊、七  
生報國などの  
精神をいふ。

贊翼  
そばから力を  
そへて輔ける  
こと。翼贊。

源頭  
そも／＼の始  
め。もと。

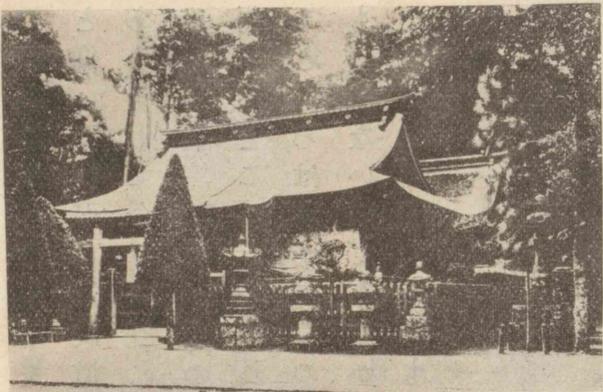


宮神取香るれ祀を神主津經

たからである。かうなると、奉公は忠君であり報國であつて、しかもその忠君報國は、單に一死國難に殉ずるといふ事を以て足れりとせず、それを以て永遠の事として、その精神を「七生滅賊」「七生報國」などいふ語で表現し、英魂雄魂は相次いで後進の士氣を鼓舞作興し、維新回天の偉業を贊翼して、明治時代の隆運を開いたのである。この義勇奉公の日本精神は、我が建國と同時に國民に本具せるものでもとより、或時代、或階級の人々に限つたものでなく、いつの代にも全國民に遍在してゐる。要は、これを自覺しこれを發揮する事に存する。そしてその淵源は夙に我が國史の源頭に仰

(一)日本書紀神代卷。

凛冽  
はげしいこと。



宮神島鹿るれ祀を神槌甕建

ぎ見られるのである。武神であらせられる建甕槌神のタケもミカもツチも、皆威靈勇武を意味する語であるが、天祖天照大神が葦原中國を征討し給ふ時に、經津主神のみがその任に推薦されて、建甕槌神はこれに與られなかつた。そこで、  
(一)この神進みて曰く、豈唯經津主神のみ丈夫にして、吾は丈夫にあらざらんやと。その辭氣慷慨、故以て經津主神に配へて葦原中國を平げしむ。

儀範  
てほん。

創業を輔け奉つたといふ言傳もあり、またその昔我が日本民族と蝦夷と對抗して多難を極めたと思はれる東國に鎮坐して、その威靈は長へに邊境を護つてゐる。實にこの武神を永遠の儀範と仰いで、我が日本武道はその歴史を進展すべきものたるのである。そして今日は既に武士の時代ではなく、全國民の時代であるから、我等は我が國の武道の淵源するところに就いて深く體得するところがなければならぬ。また我が日本武道の特色とするところは、すべてこの義勇奉公の日本精神に根柢を有しないものはないのであるから、この根本精神を離れて日本武道が何たるかを理解する事も出来ない。

— 日本武徳論 —

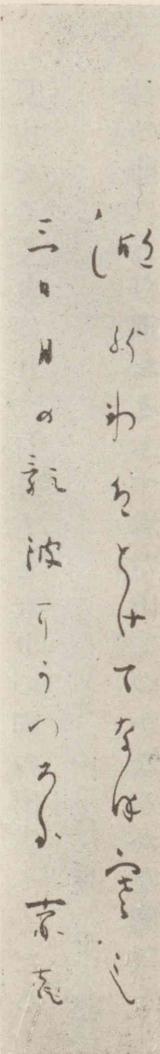
二〇 二もとある松

島木赤彦

高槻の梢にありて頬白のさへづる春となりにけるかも

(一) 歌人。本姓名は久保田俊彦。長野縣田中町。大正五年五月五日歿。

湖の水はとけなほ影にうつろふ  
けつなほ影にうつろふ  
影にうつろふ

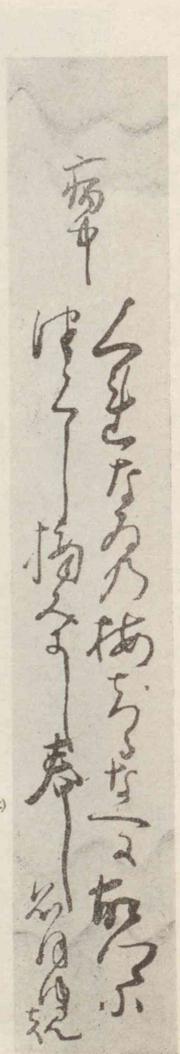


蹟筆彦赤木島

正岡子規

いたづきの癒ゆる日知らにさ庭べに秋草花の種をまかしむ

病中  
梅のなほ影にうつろふ  
梅のなほ影にうつろふ  
梅のなほ影にうつろふ



蹟筆規子岡正

若山牧水

うす紅に葉はいち早く萌出で、咲かんとすなり山櫻花  
瓶にさす芍薬に蟻つけり季節の花のこのあたらしさ

木下利玄

(二) 歌人。名は繁。宮崎縣の。昭和三十四年四月十四日歿。  
(三) 歌人。大正十四年四月十四日歿。

(一) 歌人。京都の人。昭和十年(一九三五年)歿、年六十三。

光りつゝ沖  
を行くなり  
いかばかり  
たのしきゆ  
めを載する  
白帆ぞ

(二) 歌人、小説家。茨城縣の人。大正四年(一九一五年)歿、年三十七。

寛

(三) 歌人。廣島縣の人。昭和九年(一九三四年)歿、年四十九。

(四) 歌人。名は幾多郎。昭和三十四年(一九三九年)歿、年四十三。

鳴きに鳴くあさまし長しかしがましみじかき歌を知らぬ蟬かな  
與謝野 寛

光りつゝ沖を行くなり  
いかばかりたのしきゆ  
めを載する白帆ぞ

長塚 節

たらちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたる  
みたれども

中村 憲吉

夏山をめぐり疲れて日暮方となりの國の出雲へくだる  
目の前に五百重おきふす雪の山しづかなるかな鷹ひと

古泉 千樫

蹟筆寛野謝與

おりたち  
このよろし  
いの原のう  
もよけふう  
田をかも  
うるかも  
千樫

(一) 歌人。千葉縣の人。大正二年(一九一七年)歿、年五十二。

天地のよも  
の寄合垣  
にせはま  
九里拾ひ  
に玉拾ひ居

(二) 歌人、左千夫者。宮城縣の人。明治三十二年(一九一九年)歿、年五十六。

つかける

おりたちこのたいせいのよろし  
もよけふうかも千樫  
原は太田をけふう、かも千樫

伊藤 左千夫

蹟筆樫千泉古

みぎひだり背によりつくを負ひなめて笑あふる、眞晝  
の家に

天地のよも寄合垣はま  
九里拾ひに玉拾ひ居  
左千夫

落合 直文

蹟筆夫千左藤伊

一つもて君をいは、ん一つもて親をいは、ん二もとある松

(一)第六十代醍醐天皇の御孫、天元三年(六四〇年)歿、年六十三。  
(二)克明親王。  
(三)管絃の道。  
(四)第六十二代村上天皇。

(四)山城(京都府)と近江(滋賀縣)との國境。  
(五)第五十九代宇多天皇の第八皇子。  
あながちに好む  
雑役に用する者

二一 流泉啄木

今は昔源博雅朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿の親王と申す人の子なり。萬づの事にすぐれてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。この人、村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人のめしひ庵をつくりて住みけり。名をば蟬丸とぞ言ひける。これは敦實と申しける式部卿の宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多天皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聞きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間この博雅、この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關のめしひ琵琶の上手なる由を聞きて、かの琵琶を極めて聞かまほしく思ひけれども、めしひの家ことやうなれば行かずして、人をもてうちくに蟬丸に言はせけるやうなど思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかしと。めしひこれを聞きて、その答をばせずしていはく、

世の中はとてまかくてもすごしてん  
みやもわらやもはてしなれば  
京都今も住まぬ

と。使歸りてこの由を語りければ、博雅これを聞きて、いみじく心にくゝ覺えて、心に思ふやう「我あながちにこの道を好むによりて、必ずこのめしひに會はんと思ふ心深し。それにめしひ命あらん事も難し。また我が命も知り難し。琵琶に流泉啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべき事なり。たゞこのめしひのみこそ知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かん」と思ひて、夜かの逢坂の關に行きにけり。

然れども蟬丸その曲を弾く事なかりければ、その後三年の間、夜逢坂のめしひが庵のほとりに行きて、その曲を今や弾く今や弾くとひそかに立聞きけれども、更に弾かざりけり。三年といふ八月の十五日の夜、月少しうは曇りて、風少しうち吹きたりけるに、博雅「あはれ今夜は興あり、逢坂のめしひ今夜こそ流泉啄木は弾くらめ」と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、めしひ琵琶をかき鳴しても、の哀れに思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく思ひて聞く程に、めしひ獨り心をやりて詠じていはく、

あふさかの關のあらしのはげしきに

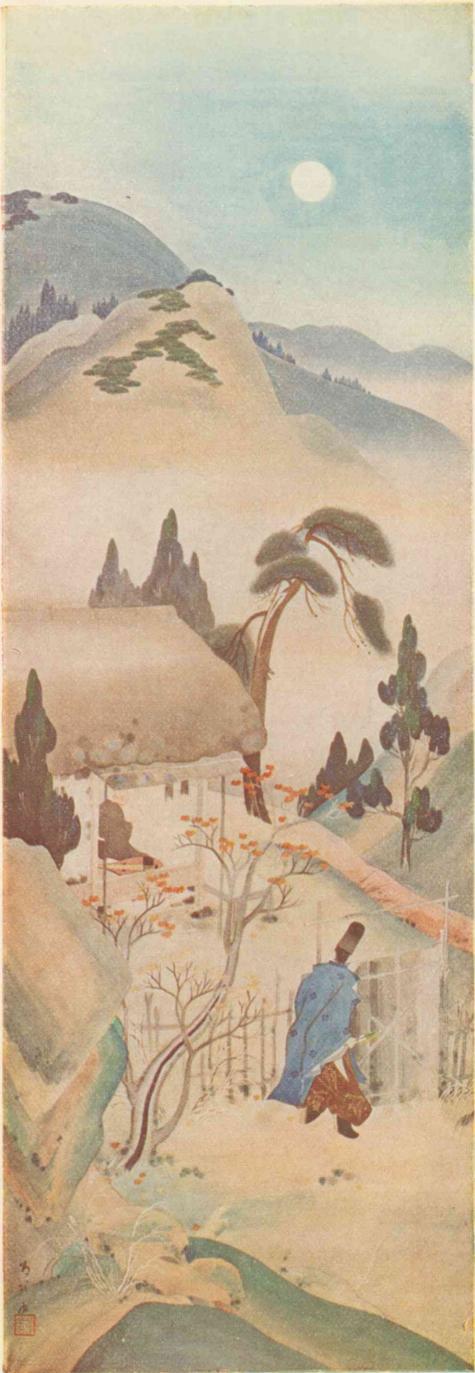
しひてぞゐたるよをすぐすとて

とて琵琶を鳴すに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀れと思ふ事限りなし。

すき者

めしひ獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあらぬすき

流泉啄木



齋藤弓弦筆

心得たらん人

者や世にあらん。今夜心得たらん人の來よかし、物語せん」と言ふを、博雅聞きて音を出して、「王城にある博雅といふ者こそ此に來たれ」と言ひければ、めしひのいはく、「かく申すは誰にかおはする」と。博雅のいはく、「我はしかん」の人なり。あながちにこの道を好むによりて、この三年この庵のほとりに來つるに、幸ひに今夜汝に會ひぬ。めしひこれを聞きて喜ぶ。その時に博雅も喜びながら庵のうちに入りて、かたみに物語などして、博雅、流泉、啄木の手を聞かん」と言ふ。めしひ「故宮はかくなん彈き給ひし」とて、件の手を博雅に傳へてけり。博雅、琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこれを習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。

これを思ふに、諸の道は唯この如く好むべきなり。それに近代はげに然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。げにこれ哀れなる事なりかし。蟬丸賤しき者なりといへども、年頃宮の彈き給ひ

ける琵琶を聞きて、極めたる上手にてありけるなり。それがめしひ  
になりければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、めしひの琵琶  
は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

(今昔物語に據る)

二二 四季小品

春 雨

萱ふける軒は雨の音しづかにて、池水のあやこまやかなるに、いと  
深く霞める梢より、翅しをれたる鳥どもの、そこはかとなく飛び  
わたるなど、いといたうをかし。暮れぬれば、ましていとしめやかに  
て、見る書さへ今ひとときは心しみぬ。風少し吹出でて、燈火のまた、  
きたるに、何とも知らぬ花の香の、ほのかにうちかをりたるなども  
をかし。

(一) 中島 廣 足

——檀園文集——

(一) 江戸時代の國  
號し。肥後と  
學した。久四  
年。文。七十四  
三。年。二。年。七

(一) 江戸時代の號歌  
人。桂園と  
した。京都に住  
人。だ。二。年。七  
三。年。六。年。七

(二) 江戸時代の泊  
酒者。國  
江。戸。の。人。と  
政。七。年。二。年。四  
四。八。年。九。年。四

風 鈴  
月の晴れわたり、花の散行くとき、を告ぐる、いと哀れなり。か  
の入相、曉うち定めたるたぐひならんや。まして水無月の照る日か  
げろひて、竹の若葉、松の葉末、そよめきいでし夕暮に聲あはせたる、  
物にも似ず。

(一) 香 川 景 樹

——かるかや集——



清水濱臣筆蹟

(一) 清 水 濱 臣

きぬた

近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむも  
またしきる。かりがねのきぬたをさそふにやあらん。きぬたの音の  
かりがねに通ふにやあらん。あなあやし。あなあやし。そもこの音の  
悲しきか。住む里の寂しきか。打つをりの憂きゆゑか。みなあらず。聞

(一)江戸時代の國學者。松の屋と號した。天保十一年(二二五)中の人。天保十七年(二二七)歿。ひた

く人の心の寂しきなり。

秋の山田

——泊酒舎文集——  
藤井高尙

秋の山田は夜こそ殊に寂しきものの流石にをかしくはあれ。あやしの小屋に賤の男が起きゐて、ひた引きならしつゝ、鹿猿を驚かし、谷水の流にかけたるひたのおのれと音するなど、とりあつめて哀れなる事多かり。かく心を盡してもるとはすれど、曉近うなりては、うちまどろむにやあらん、物の音なひもたえなくなれば、小屋近く鹿の寄り來つゝ、何のかひよとうちなきたるは、いぎたなさをいさめ顔なりや。

——松の落葉——

音なひ  
いぎたなし

未飽花  
らんかむに  
よりてむか  
ふもけふ幾  
日あかぬこ  
ころを花も  
しらなむ

(二)江戸時代の國

未飽花  
あはれんうしふりくじふもあは  
あはれんうしふりくじふもあは

蹟筆蹟 嵩伴

冬のころ

伴 嵩 蹟

學者。名は資  
芳。開田子と  
號した。近江  
三年(二四六)三  
四年(二四七)十

(一)少壯幾時兮  
奈老(漢の  
武帝「秋風辭」  
の詩句)

(二)少有大志  
嘗謂賓客曰  
丈夫爲志窮  
當益堅(老  
當益壯(後  
漢書、馬援傳)

花咲き實なりし木も紅葉を限りに冬がくれ、木の芽春雨も時雨にかはり、それもいつしか染めぬべき物なくなりぬれば、みぞれに移りて雪とつもる。一歳の月日はひま行く駒の程もなきかな。振分髪のうちなみ子が大人しくなりぬと言はれしなん、やがて老のはじめにて、終にひげ髪(一)の白くなりぬるをしもつくんと思ひ比べて、埋火の許にのみうづくまるを、若き人々はさこそ見苦しと思ふらめ。我もまたしかぞありし少壯(二)いくばく時ぞ、老をいかん」と詩にも聞ゆるを、徒に朽果てぬる事の、今更に悔ゆるもかひぞなき。前の車の覆るを後の車の戒てふ事もあり。我にな倣ひ給ひそよ。冬は歳の餘りとも言ふを、この頃の雪を集め、長き夜を空しくないね給ひそと言はまほし。老いては益壯なるべしと勇みし人は、己が類にはあらず。たゞ寒きにたへねば、ひたやごもりにこもる程に、ねぶりは宵より兆して、しかも夜深くは目覺めぬ。冬も憂し。老も憂し。こは老の

心をうつすとや言はん、冬の心をうつすとや言はん。

— 閑田文章 —

二三 黄菊白菊

黄菊白菊そのほかの名はなくもがな  
秋風や白木の弓に弦はらん  
名月や池をめぐりて夜もすがら

嵐雪 芭蕉 去來



嵐雪筆蹟

白露や無分別なるおきどころ  
又平が晝もぬけいでて踊かな  
まざくといますがごとし魂祭

宗因 几董 季吟

(一)服部氏。俳人。芭蕉の門人。年三十四年(一七六四年)歿。  
(二)向井氏。俳人。芭蕉の門人。年五十四年(一七六九年)歿。  
(三)西山氏。俳人。談林派の祖。天和二年(一六八二年)歿。  
(四)高井氏。俳人。蕪村の門人。寛政元年(一七九九年)歿。  
(五)北村氏。國學者。永二年(一八二二年)歿。  
(六)高桑氏。俳人。寛政十一年(一七九九年)歿。  
(七)高桑氏。俳人。寛政十一年(一七九九年)歿。  
(八)高桑氏。俳人。寛政十一年(一七九九年)歿。

いなづまやきのふは東けふは西  
小坊主の門に立ちけり秋の暮  
水落ちて細腰高き案山子かな  
旅人や夜寒問ひあふねぶた聲

其角 関更 蕪村 太祇

二四 蘭學開眼

王城の地に鳴り渡る南蠻寺の鐘の音は、異國情緒を漂はせると共に、我が國文化の轉生を告げる聲であつた。蓋し一國文化の消長は、外的刺戟の強弱によつて左右される。切支丹宗の渡來はポルトガル人やスペイン人の、東洋キリスト教化の意圖に基づくものであつたが、その將來した西方の異國文化は、嘗て東洋に類例のない科學文明の精粹であつた。自ら廢頽の淵に沈淪した我が國の文化は、この異國文化の洗禮を受けるに及んで、漸く再生の曙光を見

異國情緒

將來する

洗禮 再生の曙光

る事となつた。

けれども、切支丹宗門の跳梁は政治の當路者の忌諱に觸れて、やがてその布教を禁ぜられ、更にそれが鎖國にまで徹底してしまつた。文化の阻止。かくて將に流れ入らうとする泰西の文化は、この鎖國といふ政治的禁斷に會して、徒に我が國土を繞る四周の海に漂つた。

しかしながら、この峻嚴な鎖國令の下にも、オランダ人との關係は長く續けられ、長崎のオランダ屋敷に、紅毛異人の姿の絶えた事はなかつた。明朗なギャマンの器物、精緻なオランダ更紗の類、オランダ人は唯商賈として我が國人に接した。日蘭三百年の交渉、それは主として通商貿易に限られたものであつた。しかも彼等に對する畏怖、珍奇な紅毛人の智力に對する憧れは、微ながらも我が國人を驅つて、異國文化の探索に、科學知識の探究に赴かしめた。

江戸時代の蘭儒學者、名は敦書、著として甘藷先生と稱せられた。和六年(一七九九年)歿。先鞭を著ける

江戸時代の中葉、八代將軍吉宗は洋書の禁を解いた。長崎のカピタンに就いて西洋を知つた吉宗、その音樂に耳を傾けたといふ吉宗は、西洋曆の精密なのに驚歎して、曆の根本的改正を行つた。そして自ら洋學の獎勵者となつた。青木昆陽はその命を受けて、洋學の研究に先鞭を著けた第一人者となつた。當然知らるべくして知られなかつた洋學は、茲に堅き扉を開いたのである。泰西文化流入の途は、かくてまたおのづから茲に開いたのである。

一人の偉人出でて堤を切れば、滔々たる文化の流は忽ち入來つて、その國土を洗ふ。近世日本の恩人は正に將軍吉宗であつた。さはれ未知なる物に接してその眞髓に觸れ、その核心をつかむ事は容易の業ではない。先人の努力は悉くこれに籠められた。耳目に馴れない西方異國文化傳來の劈頭には、これ等先人の慘憺たる辛苦が盡されたのである。

當時に於ける洋學は即ち蘭學であつた。そしてその研究は、先づ文字を解する事から始つた。昆陽は年々長崎から江戸にやつて來るカピタンの隨從、オランダ通事を介して、オランダ人から横文字を習つた。また自ら長崎に到つてその學習に努めた。和蘭文字略考



青木昆陽

は昆陽が習ひ覺えた僅々五六百の語を、子音と母音とを附けるいはゆる「寄せ合せ」の工合から、名詞、動詞、形容詞などといふものを横文字で書いたものであつた。唯冠詞、前置詞の類はないが、それは「オランダの語には助辭多くして解し難し」とて、餘程困難なものであつたらしい。昆陽が長崎に到つた時、オランダ通事たちは、「私どもは代々通事の役を勤めてゐるが、横文字を読む事は禁制になつてゐる。それ故、唯耳で聞いて口で言ふだけで、應接の間に欺かれるやうな事があつて

幹旋

(一) 豊前中津藩の醫師。蘭學の吹田玄白等と有杉田玄白等と書有和名を解した。享和三年(二)年八十一(一)若狭小濱藩の醫師。文化七年(二)年七十五(一)若狭小濱藩の醫師。天明六年(三)年八(一)今東京市荒川區。

も押へられぬ。私どもにも横文字を読む事を周旋して戴きたい」と依頼したといふ。かくて昆陽の幹旋によつて、長崎の通事も横文字を読む事を許された。蘭學は茲に江戸と長崎とから興る事となつた。前人未到の學問の領域に足一步踏込めば、その悉くが不可解な謎に等しい。これを解かうとして、いか程の犠牲を拂ふ事か。其所に先覺者の苦痛がある。昆陽は唯一人蘭學の途を歩んだ。しかし、その晩年彼は一人の後繼者を得た。それが前野良澤である。良澤にはまた杉田玄白、中川淳庵といふ知友が出來た。この三人は相携へて、蘭學事始の辛酸を具さに嘗めたのである。

杉田玄白はオランダ人から解剖の書物を得て、その五臟六腑の圖が古來の説と甚だ異なつてゐるので、實物に照してみたいと思つてゐた。そして江戸の南千住にある小塚原に罪人の腑分のある事を聞き、淳庵をはじめ良澤をも誘つて、刑場に到つた。時に良澤は

契合する

懐から一つの蘭書を取り出して、「これを今日實驗してみたい」と玄白に圖つた。見れば玄白の書と全く同じ解剖書である。期せずして彼等兩人は同じ書物を抱いて來たのであつた。兩者の疑問は相合致し、その研究心は燃えさかつた。腑分の結果は悉く西洋の解剖圖に契合する。其所に寸分の相違のない事を知つて、今更に紅毛異人の卓越した科學的知識に驚歎したのである。是に於てか彼等は、オランダの解剖書を讀碎かうと決意した。そして知識慾に燃えた彼等は、その翌日から直ちに翻譯の業に著手したのである。

けれども、舵のない船が大洋に乗出したやうに、文字の知識に乏しい彼等は、全く自由を失つてゐる。茲に彼等の世にも珍しい翻譯譚の數々が展開されたのである。解剖圖の初には人の顔があつた。その鼻の所に「フルヘヘンド」といふ語が出てゐる。ところが良澤が長崎から求めて來た簡略な小冊子の中に、「生木を切ると、切つた跡



蘭學事始 (長谷川路可筆)

がフルヘヘンドする。また庭を掃除して塵を掃溜めるとフルヘヘンドする」とある。そこで玄白は「生木を切つた跡はもちあがる。塵がたまると高くなる。これは『堆し』と譯したら宜からう」と解いた。「鼻は顔の中で堆い。それは名案である。」と言つて、互に鬼の首でも取つたやうに喜び合つたといふ。さうかと思ふと、一行の句を呆然と三人で眺め暮したといふ事もあつた。かくて蘭學の研究に志す者も數名これに加り、月々五六回集會し研究してゐるうちに、半枚ぐらゐ讀めるやうになつた。その喜悅は我等の想像以上のものであつた。

(一)原書は「ター  
ヘル・アナト  
ミア」

に相違ない。それを「集會の日を待焦れること、女子供が祭禮を見に行くやうな心持である」と玄白は言つてゐる。そこで良澤が授けて玄白が書く、四年の間に稿を更へること十一回、世に名高い解體新書はかくして出來た。

今より百五十年前、未知未見のオランダ解剖書の翻譯を志して、僅々四年の間にその業を完成した彼等の根氣と精力とは、到底人間業ではなかつた。近代學術の鼻祖は紅毛人の智力を追ひ、嘗て見ざる慘憺たる辛苦を重ねて茲に歡喜の日を迎へたが、それはやがて我が國の文化に科學的根柢を築く素地となるものであつた。

解體新書の著作者は、言ふまでもなく良澤、玄白、淳庵の三人である。けれども良澤は自身の名を出す事を肯じなかつた。彼は、私は嘗て筑前の天満天神に誓つた事がある。自分は蘭學を始めます。どうぞこの業の成るやうに祈り奉ります。私は名聞利益の爲にするの

では御座りませぬ。その學の實を知りたいといふ念で御座ります」といふ神佛に對する誓言を、堅く守つたのであると言ふ。その發意の純眞なる、その研究の熾烈なる、百世長く傳ふべきではないか。文化轉換の鍵は時代に醒めた人の手に握られる。彼等は常に時代を洞察して、よくその趨勢を馴致して行く。

先驅の偉人が遺した功業は、おのづから後世文化の指針となるのである。蘭學開眼——それは近世文化の出現に華々しいスタートをつけたものであつた。

帝國讀本 改制新版 卷七 終

一 敬讓語(口語)

一 敬讓の意を含む文語動詞

一 國語假名遣一覽

敬讓語(口語)

一名詞

(甲) お年 お顔 お宅 お歸り お休み おいくつ  
おいくたり お一つ お十一 御返事 御挨拶

御機嫌 御本

(乙) 神さま 井上さん 太郎君

(丙) お母さま お弟さん 御尊父さま

二人代名詞

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし	あなたさま	この(お)かた	どの(お)かた
わたし	あなた	その(お)かた	どなたさま
		あの(お)かた	どなた

三 動詞

(甲) 本來の敬讓語 (○印は連語を示した)

あがる・召しあがる(食フ、飲ム)

敬讓語(口語)

あそばす・なさる(爲ル)

いらしやる(來ル、行ク、居ル)

おしやる(言フ)

おぼしめす(思フ、考ヘル)

くださる(與ヘル)

見える(來ル、居ル)

めす(呼ブ、着ル、穿ク、乗ル、買フ)

〔以上、尊敬の意を含むもの〕

○お出でになる、お出でなさる(來ル、行ク、居ル)

あがる、參上する(訪ネル、行ク)

あげる、さしあげる(與ヘル)

いたす、つかまつる(爲ル)

いただく、頂戴する(貰フ、食フ、飲ム)

うかがふ(聞ク、訪ネル)

ございます(居ル、有ル)

存する、存じ上げる(知ル)

たべる (食フ)

申す、申上げる (言フ)

まゐる (行ク、來ル)

拜見する (見ル) 拜借する (借リル)

拜讀する (讀ム) 拜聽する (聞ク)

○お目にかかる (面會スル) お目にかける、

御覽に入れる (見セル) (以上、へり下る意、)

(乙) 敬讓動詞のつくり方 「○印は連語を示した」

○見て下さる、読んで下さる (以上、尊敬の意を含むもの)

お。届。け	申。す。	申。す。	お。供。	申。す。	申。す。
致。す。	申。上。げ。る。	申。上。げ。る。	致。す。	申。上。げ。る。	申。上。げ。る。

お。歌。ひ	遊。ば。す。	遊。ば。す。	御。苦。勞	遊。ば。す。	遊。ば。す。
な。さ。る。	な。さ。る。	な。さ。る。	な。さ。る。	な。さ。る。	な。さ。る。
下。さ。る。	下。さ。る。	下。さ。る。	下。さ。る。	下。さ。る。	下。さ。る。
に、な。る。	に、な。る。	に、な。る。	に、な。る。	に、な。る。	に、な。る。

○お届ける、お供する (以上、へり下る意のもの)

(丙) 尊敬の意の添へ方 (助動詞「れる」を付ける)

父は英書も讀まれる。

今日は佐藤君も來られる

(丁) 丁寧の意の添へ方 (助動詞「ます」を付ける)

先生も仰つしやいます。

私からも申上げます。

先生もお歌ひになります。

私もお供致します。

紙が飛びます。

四 形容詞

(甲) 「お」を付ける。

こんなにお暑いのに……………。

六 副詞

おまめにお働きなさいませぬ。

ごゆつくりなさいまし。

ここはお静かではございません。

七 「で、ある」「だ」の意

助動詞「です」、連語「でございます」などを  
用ひる。

あれは學校です。

あれは學校で ございます。

あのかたは先生で いらつしやいます。

大將はその時、少將で お出でになつた。

五 形容動詞 (「お」「ご」を付ける)

それはお珍しからう。

若しお寒かつたら……………。

あそこはお静かでせう。

あそこはお静かでしたか。

そんなにご丈夫なら、もう安心ですね。

ご丁寧な御挨拶で痛み入ります。

敬讓の意を含む文語動詞

(甲) 尊敬の意を含む語

あそばす(爲ル)  
 います、ます、まします(アル、居ル、行ク、來ル)  
 おはす、おはします(同前)  
 おほす(言フ、言ヒツケル)  
 おほす、おほしめす(思フ)  
 きこしめす(聞ク、飲ム、食フ)  
 しろしめす(知ル、統べ治メル)  
 たてまつる(著ル、乗ル)  
 たまふ、たぶ(與ヘル)  
 のたまふ(言フ)

(乙)

まゐる(飲ム、食フ、著ル)  
 みそなはず(見ル)  
 めす(飲ム、食フ、著ル、乗ル)  
 わたる(アル、居ル)  
 へり下る意、丁寧の意を含むもの  
 いたす、つかまつる(爲ル)  
 うけたまはる(聞ク、承諾スル)  
 さふらふ(アル、居ル)  
 きこゆ、まうす(言フ)  
 たてまつる、まゐらす(與ヘル)  
 たまはる(貰フ、受ケル)  
 はべり(アル、居ル)  
 まかる(退ク、歸ル、行ク)  
 まゐる(行ク)

國語假名遣一覽

わ (は)	わ (輪) くちわ(口輪—響) おほわ(大輪) おもわ(面輪) はにわ(埴輪) わ廊 くるわ(廓) わ曲 うらわ(浦曲) いそわ(磯曲) あわ(沫) あわもり(泡盛) みなわ(水沫) わけ(分) いひわけ(言分) ことわけ(辭分) おひわけ(追分) のわき(野分) わけがら(譯柄) ひきわけ(引分) わた(綿)	わた(腸) はらわた(腸) このわた(海鼠腸) こわ(聲) こわいろ(聲色) こわね(聲音) こわづかひ(聲遣) こわづくろひ(聲づくろひ) こわだか(聲高) わざ(業) しわざ(仕業) ことわざ(言葉—諺) わり(割) ことわり(事割—理) しわ(皺) ひわ(鴉) たわら(俵) いわし(鱒) あわつ(周章) たわし(束藁子) くわぬ(慈姑) たわやか(嬋娟) たわやめ(手弱女) たわむ(撓む)	よわし(弱し) かわく(乾く) さわぐ(騒ぐ) すわる(坐る) あわたゞし(惶し) さわやか(爽か) たわいなし 語の中や下に来る「わ」は右に 舉げた他は「は」を用ひる。例 へば 川 澤 粟 瓦 雞 庭 桑 諏訪 安房 永久 繩 障 廻る 變る かはいら し等	お (井) おど(井戸) おげた(井桁) おげき(井堰) おづつ(井筒) おくひ(井杭)	お (居) おざり(居去—膝行) かもお(鴨居) しきお(敷居—闕) くもお(雲居) くらお(座居—位) とのお(殿居—宿直) まとお(圓居) もとお(本居—基) まおる(目居る—參る、詣る) まおる(猪—のし) おのこ(亥の子—豚) おくび(猪首) いぬお(戌亥—乾) お(亥) お (率) ひきおる(引率る—率る、將 もちおる(持率る—用、以 お (藺) おほお(大藺) おぐさ(藺草)
-------	--	--	---	---	---







帝國讀本改新制版

發行所

資合社 富山房

東京市神田區神保町一丁目三番地  
電話神田二一七一—二一七八番  
振替口座東京五〇一

編者	芳賀 矢一
訂補者	上田 萬福
同行者	長谷川 福平
發行者	資合社 富山房 東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者	坂本 嘉治 馬
印刷所	東京印刷株式會社 東京市深川區白河町四丁目一番地

大正十四年二月十二日 訂正八版印刷  
 昭和十五年八月十八日 訂正八版印刷  
 昭和十六年十二月十三日 訂正八版印刷  
 昭和十九年七月四日 訂正五版發行  
 昭和二十年六月二十五日 訂正七版印刷  
 昭和二十二年六月二十八日 訂正七版發行

定價 卷一—卷九 金六拾錢  
卷十 金五拾五錢





